家庭雜誌

第五拾二號

青年叢書

全部拾卷完結
毎月一卷發兌

身高峰に起つ眼千里の觀なからんや。新勝は國運を急變し而して國勢の進轉は國民の資格と伴はざるべからず。國民の資格を高くするの道果して如何、連勝國は大陸大洋の主人たり、一大故鄕を造るの道果して如何。癒ゆべからざる鐵創を頑清に加へ、新興國として世界の嫉妬と畏懼の中心に立てる大日本は武裝せるスパルタに非らずや。國運は新組織を要す。完美なる國民は完美なる個人也、樹を植て一家十年の計を爲す者一國百年の長計は人を造るに在るを忘るべけん乎、武育的國民にして高義的市民、時務を知り技術を有せる人、一代の人にして世界の人を造るは一等國の國是、今日の急務也、大なる日本人を造るは大なる日本國を形る唯一の道に非らずや。新人物は新事業を産み、新事業は新國運を開く。學窓の下、西天の一方を睥睨し雄心壯圖を抱へし新國民たらんとする人よ『青年叢書』を讀め。

『青年叢書』目次は如左

◎第壹卷　武備教育
◎第二卷　遠征
◎第三卷　市民
◎第四卷　職業
◎第五卷　學校
◎第六卷　技術
◎第七卷　傳記
◎第八卷　時世
◎第九卷　實踐道德
◎第十卷　壯遊

征清壯烈談

定價 十三錢
郵税 貳錢

大喝采を博したる「日清軍記」前後篇の後に此著出づ、「壯烈談」は征清事件發端以來の海陸戰士の逸事談也、美を擧げ眞を描く筆勢神の如し。此書「日清軍記」と並び出でゝ世の征清軍記恐らく光彩を失はん。久保田金僊氏の實見畫數十を挿む

本書に對する各新聞批評

●征清役の零聞逸事を收拾し以て此編を成す曩には日清軍記の著あり今は軍記に漏れたるものを蒐めて其及ばざる所を補はんとす彼此相須ち乃ち完璧となる國民忠烈の氣象を鼓動せしむる亦與かりて力なしとせんや(東京朝日) ●著者の意は征清義戰の常山紀談を作らんとするに在りと、卷中載する所ろの紀事亦た慶長元和以前の逸聞を讀むに勝るものなからんや(日本) ●征清の役起りてより我海陸將士の戰陣に臨みて勇戰奮鬪の間だに於ける美談佳話甚だ少きにあらず本書は則ち是れ等痛快壯烈の談話を悉く網羅せしもの、單に讀んで面白きのみならず一つには兵士の龜鑑となり一つには國民の元氣を鼓舞するに於て寧ろ彼の乾燥無味なる長篇の戰爭記に優る事萬々ならん(中央) ●著者は征清義戰の常山紀談を作らんとして本篇を著はせりと故あるかな其の叙する所の紀事片々尙且つ大和男兒が正氣にあらざるなきを其進んで國難に殉じ笑て敵刄に斃るゝの壯事快事錚々神躍り氣昂る(讀賣) ●洵に是れ『征清義戰の常山紀談』、神洲男兒の本色を寫し出してなか〳〵に面白し(報知) ●征清將士の義勇忠烈談なり、著者の意、征清義戰の常山紀談を作らんとするに在りと云ふ、書中記する所一として悲絕壯絕の談に非ざるなし、此書を讀で感奮興起せざる者は血なく涙なき無情動物也、(東京經濟雜誌)

●著者の叙言に云はく、著書の微衷は征清義戰の常山紀談を作らんとするに在り、故に其記事たるや實に片々たる零聞逸事に過ぎざるが如しと雖も、讀み去り讀み來れば神州男兒の氣慨は實に天日を呑吐するの風慨あり」と、其文章の流暢と其事實の壯絕なるとによりて一讀卷を措く能はざらしむ(毎日) ●忠愛壯烈の好談柄に富む征清の役に若くはなし此書無數の零話を累ね間々小畵を挿み讀みて其倦を知らず當下少年者の愛讀中其首位を占むべきもの蓋し指を此書に屈せずんばあらざるべし(大阪毎日)

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

徳富猪一郎著

三版

大日本膨脹論

定價 十錢
郵稅 二錢

大日本膨脹論とは何ぞや、

◎大日本の膨脹す可き命運と、大日本を膨脹せしむ可き、國民の天職と、併せて如何にして、膨脹せしむ可きやを論ず。◎著者は歴史的眼孔によりて、時務的經綸を說く。故に議論深厚にして淺疎ならず。適切にして精該なり。◎總て『國民之友』『國民新聞』に掲載したるもの。單行の論文なれども、其の脉絡貫通す。讀者或ひは如何に、著者が事に應じ、類に觸れて、其平生の見解を適用するを知るを得む。即ち看て征清事件、急湍激流史の一巻と倣すも不可なし。

近刊

日清軍記續編

定價十五錢
郵稅 四錢

日清軍記前篇は端を朝鮮內亂東學黨に發し平壤陷落の勇擧に收め後篇は山縣大將出發より旅順口征服に至る各新聞雜誌は口々に評して曰く宛然一部の大平記を讀むが如し

續編今や刊に上らんとす

讀者此三篇を併せ以て征淸戰爭錄の完備なるものを快馬奔流の文章に求め得べし

發兌元

臺灣

定價 拾錢
郵稅 二錢

臺灣地圖

定價一錢五厘
郵稅五枚迄 二錢

國民は其國土を知らざるべからず、臺灣は今や我か有となる、日本國民は其故鄉を知るが如く此新故鄉を知らざるべからず、

而して之を知るは民友社出版の『臺灣』及び其『地圖』を讀むの外、豈法あらん耶。

最好の機會に最好の著とは此の謂也

東京市京橋區
日吉町四番地

民友社

國民叢書

書名	定價	郵稅
人物管見	十五錢	二錢
青年と教育	十五錢	四錢
靜思餘錄	十五錢	四錢
文學斷片	十五錢	四錢
天然と人	二十錢	四錢

十二文豪

巻	書名	定價	郵稅
第一巻	カーライル	十八錢	四錢
第二巻	マコウレー	十八錢	四錢
第三巻	荻生徂徠	十八錢	四錢
第四巻	ヲルヅヲルス	十八錢	四錢
第五巻	ゲーテ	十八錢	四錢
第六巻	エマルソン	十八錢	四錢
第七巻	近松門左衛門	十八錢	四錢
第八巻	新井白石	十八錢	四錢
號外	ジヨンソン	二十錢	四錢

發兌元

東京市京橋區日吉町

民友社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵税共
一冊	金五錢	金五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人　有馬俊彥
編輯人　塚越芳太郎
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社
(本社電話番號七十番)

明治廿八年四月廿五日發行
家庭雜誌第五拾貳號

目錄


世の中は
三日見ぬ

家庭雜誌第五拾貳號
（明治廿八年四月廿五日發兌）

社説

春の野に遊べる婦人へ

人間一生、勉强のみにては暮し難し、時としては遊樂なかるべからず。屈伸といふとは處生の秘訣にして時には眉を開きて笑ふとも亦人生の趣を多くすることにて、此頃の時節には家族打連れて野くれ山くれ遊び歩行も亦是れ人生の樂事なるべけれ。

さりながら遊樂の中にも子女の智見を進めんと心掛くべきは母たる人の務めなれば、春の野にいとし兒とむれ遊ぶ時にも此心得あるべきとなり。特に百草盡く榮へて蜂蝶のいそがはしき時は木草學と生物學との智識を與へんには最好の時節なれば。嫁菜摘む時も土筆取る時も蝶を追ふ時も折りに觸れて、子女の幼き心を啓發せば其益決して僅小ならざるべし。



觀察力は幼稚なる時より養成すべきものにして幼き心に養はれたる研究の精神は年と共に發達するものなれば、かゝる時に於て周圍の自然物に就き深き注意をなさしむるは、彼等の心に自然を愛好するの念を呼び起すものにて、自ら其風神を養はしむるものなり。

職蟻が勉强なる樣、蜂の巣を作る智慧、蝶の幼虫より成蟲に至る順序、雄蕋雌蕋のと、花粉の事など實に面

白き敎訓にして、小兒若しかゝる自然の奇趣を知り得たらんには天地の間に存する微妙の意匠をさとりて、造化の妙機を會得するの時あるべし。

されば此際母たらん人は簡易なる生物本草の二科を修めて、子弟を誘導されたき者なり。さりながら怨むらくは平生かゝる用心なき人多きのみならず、たまたま此道の素養ある人にても其子女を着飾らせて其運動の自由をさめたげ、かけめぐりのならぬ樣にするとを常とす。華美なる春衣を着せて歩き廻はらしめんとは父母には得意のとなるべけれど小兒の爲めには智性の上にも、身體の上にも害多きとなり。成るべく手足の自由になる成るべく、丈夫なる衣服を着せて、泥の上にても草の上にても餘念なく遊び得るやうにせられたきものなり。

史談

ウイルヘルム皇帝は小兒の愛友なり

昔獨逸にウイルヘルムと申す帝おはしましけりこの帝つねに小兒等を愛し給ふ事貴賤の別更になしされば首都伯林の童等は更にも云はずライン河の近傍にあるエムスと聞ゆる浴場の童らも男女の別ちなく長閑き春の花園に菫たつぬる胡蝶のことくこの帝をこそは親みうやまひ奉りしか。

帝は年毎にエムスの浴場に幸し給ひ俗塵を洗ひて躰を養ひ洒然たる風物に觸れ滿心の快樂を求め給ふ邊りに茂る青人草は帝の御幸を今や今やと首を伸して仰望する有樣なるがなかにも童らは慈愛深き祖父母の優にや

さしき膝許に近きよる心地してよろこひうれしみ奉けり錦絵の草紙等に描がけるが如き最も尊大厳正に玉冠の光輝千里を照し錦襴の御衣人目を眩ます大御粧にはあらで質素を旨とし給ふは子供等か家の父兄と聊かも異り給ふ事もなかりければ是れそ童らの疑を抱く源とはなりぬるされば一度も帝に謁見せざりし者は誰も皆尋常の浴客とこそは思ひたりけれ。

然れも帝の軍装をなし銀鷹の甲を戴り黄金の剣を帯び百萬の敵をも一撃の下に打破り給はんほとの雄々しく鋭きも稜威のなかにもまた温和の泉は混々として時々溢れ出づべき御有様なれば頑是なき童らは知らず〱進みて握手の禮をなす事あれば帝はその無禮を怒らせ給はで反て其手を握りいと悦しげに打握り給ふなと實に小児らの為にありかたき友垣にてそおはしける。

或日一人の男児皇帝の散歩し給ふを遮り奉り一禮して問て申さく「君は眞のウイルヘルム皇帝にておはするか」帝は「然り予も我を皇帝なりと思へり愛らしき御身よ誰にして何の用かある」と微笑しつゝ答給へり。「僕の名も同じくウイルヘルムと申すなり而て僕は兵隊とならん事を望み候ふ」と満面に勇しさと嬉しさとを含み且つ雄々しく物語りぬ「併し皇帝よ必ず知り給ふなからん兵隊の中にても彼の赤色の線條ある服を着け純白の羽毛を着たる帽を頂ける兵隊を希ひ候ふなり」と申しければウイルヘルム皇帝はいとも嬉しげにこの壮快活潑なる男児の頭上に手を掛けられ「願くは神よ此児に幸福を與へたまへ」「我愛む幼男よ汝壮年に至らば來りて我子のフリッツに語れ我を赤條白毛の兵隊に編入し給へそは已に老帝ウイルヘルムが僕に許し給ひし所なり」と謂へと仰せありければ小児は己れが願の早成就せるが如く歡喜措く能ず禮をなしつゝ躍り出て有りし事どもを母に語らんとて奔り去れり或日又ウイルヘルム帝エムスの景色よき所のバンクに息ひ給

ふ時に數多の女兒等は其側らにて毬を投げて戯れ遊びき一人は過て毬を帝の御足の許に投げ付たり帝直に手に取り舉げ見給ふ時に當り一小女奔り來り少しもおくしたる色も顯さずいと恭やしう申やう「何卒其毬を妾に返し與へ給へ我親愛し奉る皇帝よ」と帝は其振舞の無邪氣に愛らしきをめで給ひ其毬を與へ給しかば小女は押戴き一禮して遁るが如くに其所を走り去りきとなむ。

文藝

嫁形氣

嵯峨のやま人

茶碗と茶碗の鉢合
われて昔の土に歸り
嫁と姑の角突合

もつれて嫁里へ歸る事

其より朝の御飯を濟して後も、一度もつれた爭は容易に脩まりませんは、其日は一日姑の御機嫌がわるく、小言も賤の小手巻の樣に、幾度となく繰返されたが、嫁の耳には章魚の譬、さのみきゝめもない樣です。斯て夜に入てから、嫁は千代太をねかさうと思ひ、添乳の床にねんころ歌、猿蟹の話などして居たが晝の疲で吾を忘れ、いつしかついうと〳〵と睡ッたのが元、さお大事となりました。

おさんや、おさん！

けはしく呼び立つるのは姑の聲です、が　ねて居る耳へは聞えませんわ

おさん、おさん！

更に鋭き聲が、室内の障子をゆすらん計聞えました、が何の返事も有ません、今はたまりかねたもの歟、勃然として

また性無女が、お嬶だ、眞成に、どうしてくれやう。」
さも腹立たしさうに立上り、隔ての襖を荒々しく開て、

おさん！

と一聲、睡て居る頭の上で、雷の樣に鳴ました、是ではいかな臥坊でも、目を覺さない事は出來ません、

ハイ、ハイ。

喫驚して目を覺し、さもねむさうに細々と目を開けば、こは如何に、枕上に姑が立て居ます、驚て立擧れば、姑はさも憎々しげに嫁を睨み附ながら。

おさん、如何したのだお前、また睡て居て、何故さう性度なく眠るのだなう、幾ら呼でも返事もしないで、何といふ阿呆だらうなう、仕事を山の樣に抱へて居ながら。

食ひ附やうに叱りました。嫁も少しむッとした、所謂膨面といふ貌をしたが、其身のわるいのだから逆ひもせず、誠に濟ませんでした、と言ひながら立て針箱を取出し、洋燈の前に坐りました、姑は突立たまゝ身動もせず、じッと其後を目で追て居たが、やがて嫁が洋燈の前へ坐るや否、其身も火鉢の前へ坐を搆へて、扨小言は幾度となく繰返されました。

淡白として置ば宜が、餘うるさい程くり返した故、嫁も心には面白くない。

然し小言もいふ丈言たら、もう用もないから臥たら宜らうに、其もねない、今に嫁が睡を始るだらう、始たら叱ッてやらうと頑張て居ます、此姑は餘程苦勞性の人と見えます。

果して然り、嫁は睡を始ました、姑は其樣子を見て豪をわかし。

おさん！

ハイ

と一聲鋭く叫びました、其聲は嫁の耳へは五寸釘です。

嫁は喫驚して目を開きました。姑は得意に小言です。

嫁も左樣々々は默ても居られません。よく小言計被仰ますが、私だッて少も睡なぞは仕度い事は有ませんが、朝から晩迄、獨樂の樣にくる〳〵廻ッて働て居るのですもの、躰が疲て居るから睡眠も出ますわ。

何だ、働くから睡が出る、當然さ、お前を此家へ貰ッたのは、働て貰ふ積で貰ッたのだもの、又何處の國に嫁を貰ふのに、遊ばせて置かうと思ッて貰ふものが有るもの歟、働くのは當然だ、其を働くから睡が出るとは何の事だ、其樣太い事を言ふ樣では、此家へはおかれないから出て往け、さあたッた今出てゆけ。

斯言ひ出しては、後へは引ぬ氣質とて、其夜の中に媒妁は呼寄せられ、嫁は里へ歸すといふ騷ぎ、嫁は夫が留主の事なれば、戻さるゝも夫の手からでなければ、と佗半分に剛情を張る、媒妁も種々なだめたが、姑之を聞入れず、千代太が目を覺して母を慕ふのも、姑の心を和ぐるの力なく、嫁は夫の留主に姑の手で里へ歸さるゝ事となりました。

歸省日記

不知火生

一月三十一日の夜筑紫の婦翁危篤の報に接し、急行熊本に向ふ。長亭短亭雪又雨、寒威凌ぎ難きに、遠征將士の苦辛も思はれて、

唐土が原に臥すてふ武夫の
寒さ身にしむ雪の夕くれ

二日尾の道に着し、盡日船を待てども、海あれて船來らず。心は頻りに西天に飛ぶ。

いそぐ身にあらしはげにもうき世哉

三日朝船に乘る。甲板は海風身を切る如きも、室內は

暖かにして室の如し。

　　寄合ふてぬくみは旅の情け哉

四日九州鐵道に乘る。列車筑後矢部川停車塲に着する時、大勢の田舍漢ドヤ〳〵車内に上り來り、室外を見れば、無數の老幼男女停車塲内に打つどひ、「天皇陛下萬歳、西山松太郎萬歳」と大書したる旗押し立て、喝采の聲四方に滿つ。對座せる田舍老爺に事の由を質せば、西山松太郎は此たび第六師團後備騎兵徴發の命に應じて此汽車より出發する者にて、閭里皆盛に之を送り、己等も次の停車塲まで送るなりと答ふ。老爺更に余に告げて曰く、コウナッテは最早進む外はありません、私も息子を一人熊本師團に出して居ります」と。語ゝ欣々として更に愁容を見ず。余携ふる所の福岡日々新聞號外威海衛進擊の報を讀み聞かすれは、彼等聲をあげて喝采す。

熊本に着すれば、婦翁已に柩の中にあり。遺骸の前に跪きて、初對面の禮をなす。

　　情けなや位牌に向ひて初對面

＊　＊　＊　＊

五六七八九の五日、親戚を歷訪す。七年ぶりに歸り來りて、故鄕宛ながら他鄕の感あり。汽笛枕に響き、電燈店に照り、紡績所の煙突靑空を突破し、十八年前神風連の熊本は天晴九州の大都會となりぬ。依然たるは唯阿蘇の山色、銀杏城、名のみ白川の水あるのみ。吾生ひ立ちしなつかしき家を訪へば、殆んど舊時の態を見ず。唯籬の梅花は昔の香ににほひ、猗々たる綠竹は水に臨み、吾姉の家の機音舊によりて竹藪の内より出づるを聞くのみ。父君に跟して朝まはりせし圃は荒れて、數十の健兒が朝霜を蹴つて竹刀を鬪はせし塾舍のあとは麥油々として秀で、家兄の書窓には盡日淸香を送りし名花「籬の內」は二倍も丈のび、余等が幼なかりし時容易に攀ぢたる椎の木は、今や蔚然たる大樹と

なれり。老いたる者はます／＼老ひぬ。長じたる者は漸く老ひぬ。若き者は長じぬ。幼なき者は著しく生ひ立ちぬ。去る時吾膝に上りて戯れし姪兒、今は銀杏髷の乙女となりしを見れば、七年豈に短かしと云ふを得むや。

幾多の人は七年の間に去りまた來りぬ。嫁したる彼女あり。父となりし彼あり。墜ちたる彼女あり。進みし彼あり。別けて心を傷ましめしは逝きし彼なり。

彼は余が從弟なりき。我等の幼きや、共に學び、共に遊べり。後余は京都に行けり、彼も跡を追ふて來れり。余熊本に下れり、彼も跡を逐ふて下れり。余帝都に行く、彼れ來らんと欲して病は彼を繫留せり。彼は斷腸の書を送れり。彼は終に廿五年の春を以て逝きぬ。

鄕に歸りし翌々日、余は數枝の梅と榊を携へて、往て其墓を訪へり。彼が家は熊城の西南一里の郊外にあり、一小丘に立てり。家より百歩を上れば、墳墓なり。南國日暖かにして二月已に春なり。丘上には處々に白梅花雲の如く麥隴を擁し、墳畔には一樹の深紅梅今を盛りに咲けり。彼が祖父翁の墓は正面にあり。彼は其兄と合葬せられて其傍に侍せり。瞑目すれば生ける彼れ忽然として我前に立ち、目を開けば一基の孤墳前にあり。花立ての水を汲みかへ、花を手向けて、默思良久ふす。

　思ひきや年ふるさとにかへり來て
　　君かおくつき今日訪はむとは

起て望む。日はまさに丘の西にあり。飯田雁回宇土の諸峰遙かに打霞み、修竹の村松柏の舍麥畝の間に點々し、近くは丘上の梅花雪の如く、悠々たる風光轉た人をして人生の限りなきを思はしむ。

思ふ、幾年の昔、しば／＼此處に來り、今は此紅梅花下に安眠する友と共に、石に坐して今見る如き風景を眺めしを。秋の眞晝に彼と共に女郎花を掘りしも此山な

り。春の夕に石上に臥して彼と共に雲の行衛を見送りしも此山なり。此丘の楠の蔭に彼と共に夏日の涼を趁ひき。此丘の櫨の木の下に蕭條たる冬枯の景色を眺めしこともありき。思へば恰も昨の如く、語らんと欲して顧みれば、孤墳後にあり。梅香薫ずる所、鳥聲兩三、天青く、日遠し。

＊　＊　＊　＊　＊

十日、まさに歸らむとして、妻の病むに遭ひ、藥餌世界に錮せらる丶もの殆んど五十日。此間に威海衛落ちて丁汝昌自殺し、張邵去て李老爺來り、營口牛莊我軍に畧せられ、澎湖島占領せられ、狂漢出で丶大事を誤まらむとし、起れる事、移れる人、社會の事は走馬燈の如く、天然界には氷雪去つて日漸く長く、梅花落ちて柳條青み、春雨降つて櫻蕾肥へ、菜花大麥桃紅李白、春は故山に滿ちぬ。

春雨

開くからに千々の思ぞ結ぼる丶
　糸よりほそきはるさめの音

故鄕柳

繰りかへしむかし忍べば春の日の
　恨は長き青柳の糸

詫麻原頭の春

菜の花や雲雀や阿蘇の薄かすみ

閉居五十日出で見れば桃花正に灼々

ふひと出て見たれば桃の盛り哉

＊　＊　＊　＊

三月晦日、日南温泉に行く。途にして日暮れ、新月弓の如く帆肩にかゝる。

不知火の沖の上とをく日はくれて
　帆づなにかゝる三日月の影

野坂の浦一帶の山、正に山櫻の盛なり。宿を出づれば、飛花雪の如く衣に落つ。帝都を出で丶已に六句「昔去

雪如花、今來花似雪」の句も思はれて、花と降る、雪踏み分けて、都をば、出でにし時は、昨日ぞと、思ひしものを、春霞、立つ日つもれば、流石に、ふるびにけりな旅衣、咲きにけらしなさくら花、櫻の花のふる里は、雪とのみこそ花は散りけれ。

　雪とのみ花ふるさとに旅ねして
　　都の春を思ひこそやれ

四月三日、急に熊本に歸る、細雨霏々、漁舟一葉霞に網す。

　何處まで海ぞ霞の漁舟

＊　＊　＊　＊

四日熊城を立つ。玄海洋も春霞なり。

　玄海は凪ぎて高麗まで霞哉

門司に保安條例の周到なるを實驗し、公義禮裕二艦の宛ながら肩をすぼめて大小船舶の中に潜むを見、海を隔て空しく春帆樓を望み、宇品に數十艘の艨艟林の如く橋を連ねて浮べるを見、廣島にまさに出發に瀕する幾萬の貔貅の意氣虹の如きを目撃し、七日山陽鐵道に乘りて、盡日麥圃の中を行く。

　春風や終日麥の中の旅

姫路を過ぎて黄昏微雨瀟々たり。

　小雨降るはりまの野末見渡せば
　　寂しく立てる松の一本

八日神戸より京都に行く。一望菜花の盛なり。

　津の國の難波の春を來て見れば
　　すゞ菜の花の盛りなりけり

九日京都を立つ。湖東の春色畫よりも好し。

　菜の花に入り日や比良は夕かすみ

關ヶ原を過ぐる時、月出でたり。

　關ヶ原や昔を弔へばさりげなく
　　山の端出る春の夜の月

十日濱松を立ちて夜おそく家につきぬ。白髮の二親猶眠らずして待ち玉へり。慈顔を拜して喜胸に滿つ。故鄕に行いて故鄕却つて他鄕の如く、歸り來つて他鄕眞に是れ故鄕の感あり。嗚呼余は今ぞ知りぬ、吾故鄕の所在を。

子を喪ひし親

湖處子

母「我が背の君よ、我がせこよ、
父よ母よとしたひつる、
二人が中の思ひ子は、
ひとりいづこに往きにけん」。

父「いたくな泣きそわが妹子よ、
二人が中の思ひ子は、
まづしき親の家を出でゝ、
ゆだけき國にゆきにけり」。

母「さはさりながら我がせこよ、
父よ母よとしたひつる、
二人が中の思ひ子は、
一人いづくに往きにけん」。

父「いたくな泣きそ我が妹子よ、
二人が中の思ひ子は、
かなしくつらき世をすてゝ、
たのしき國に往きにけり」。

母「さはさりながら我がせこよ、
さばかり親をしたひつる、
二人が中の思ひ子は、

一人いづくに往きにけん」。

父「きゝわけ玉へ我が妹子よ、
我はまづしき親なれば、
とみたる家をつがせんと、
神は我が子をめしませり」。

母「さはさりながら我がせこよ、
かはかり思ふ思ひ子を、
つれなく神にうつされて、
親にはなにが成るならむ」。

父「さなうらみぞよ我が妹子よ、
神は賜ひしたまものを、
こゝろのまゝに取りますと、
牧師のきみはのたまひき」。

母「さはさりながら我がせこよ、
與へたまへし神なれば、
うべ取りますと思へども、
唯ひとり子にわかれたる、
親にはなにがなるならむ」。

父「きゝわけ玉へ我が妹子よ
神は慈悲ある神なれば、
ふたゝび渠を賜ふべし、
その日を待てとおごそかに、
牧師の君はのたまひき」。

二人「牧師の君のもつ如き、
固き信をば我もたは。
十人の子供なくすとも、
悲しきとはなからんを。」

きらめき出つる明星よ

同人

夕の空にいとはやも、
きらめき出づる明星よ。
空しくなりし思ひ子を、
送りてかへるそのゆふべ、
一つひかれる汝がかげを、
わが家のうへに見てしより、
いとしき「輝生」が亡き靈を、
それぞと思ひそめにけり。

夕の空にいとはやも、
きらめきいつる明星よ。
いとしき「輝生」かなき玉を、
それぞと思ひそめしより、
なきのなみたにくれし身も、
あやしく心やはらぎて、
暮るゝおそしと夕な夕な、
なれを軒端に待ちいてつ。

夕のそらにいとはやも、
きらめき出る明星よ。
かなしかりける其日より、
年月なかく經たれども、
うき雲ゆゑに、雨ゆゑに、
汝が影見えぬ夕な夕な、
今もこゝろのいたむと、
むかしありしに異ならず。

夕のそらにいとはやも、
きらめき出づる明星よ。

うれしき汝のなかりせば、
愛するものを喪ひし、
こゝろは何になくさまむ。
うれしき汝のなかりせば、
愛するものゝ先たちて、
天にありとししるべきや。

＊　＊　＊　＊

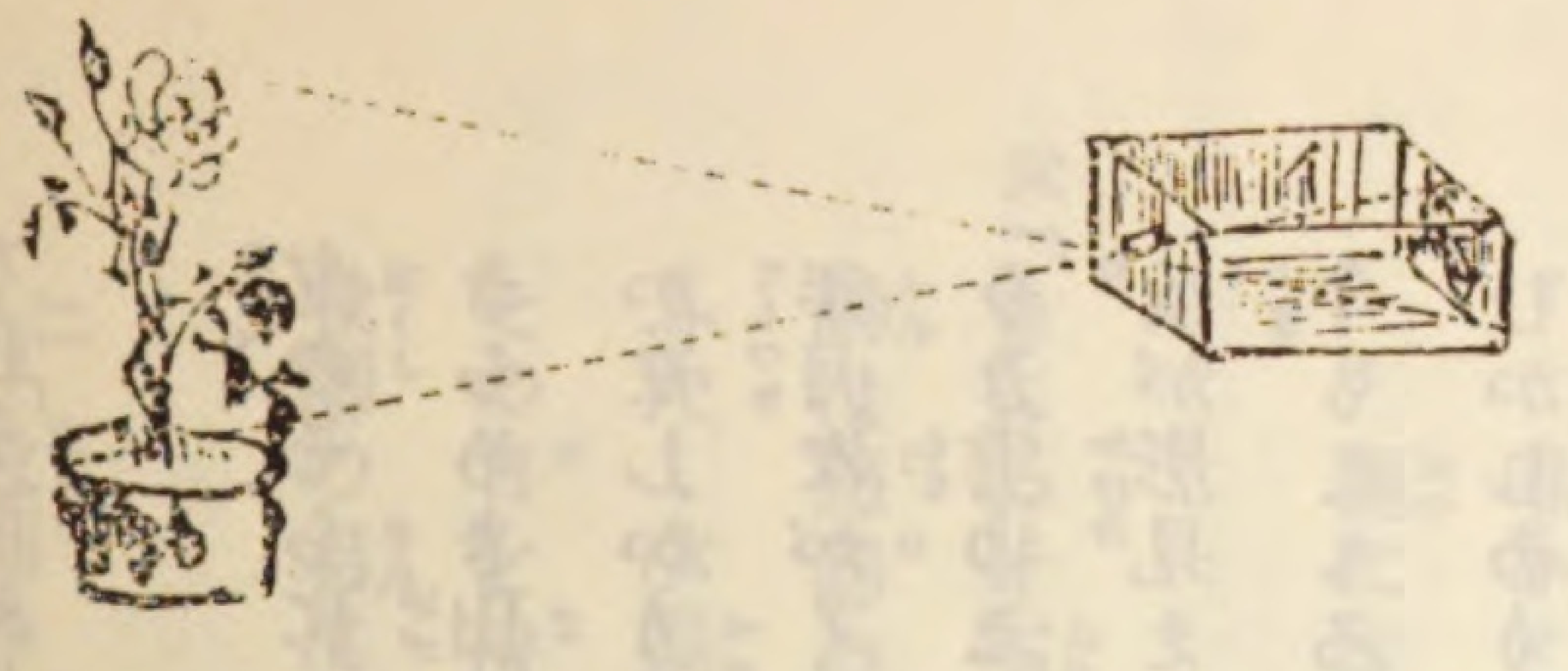
てるをがいにしその夕、
わが家のうへに見てしより。
きらめきいづる明星を、
待ち出てぬ夜はなかりけり。

科學

光線のはなし（中）

姉上々々約束の談を續づけ給へと、渇したる者の水を求むるが如き眼を以て、姉の用事の終はるを待ち詫びたる太郎の樣は、日頃のいたつらなる太郎と殆ど變はりて見へけり。

姉は先程より、臺所にて、何かごし〳〵と鋸るけはひなりしが、持ち來りたるは蜜柑箱也。其箱の隙間々々には紙を張つめて、光線の進入を防せぎ、第一圖に示めせる（イ）の所に箱の中を覗ぞくに適せる、小さき穴を穿がち、（ロ）の所にも針の先にて穿がちたる、最も小さき穴を明けたる箱なりき。又た何事をか爲し初むるやと、樂しみて言葉を



第一圖

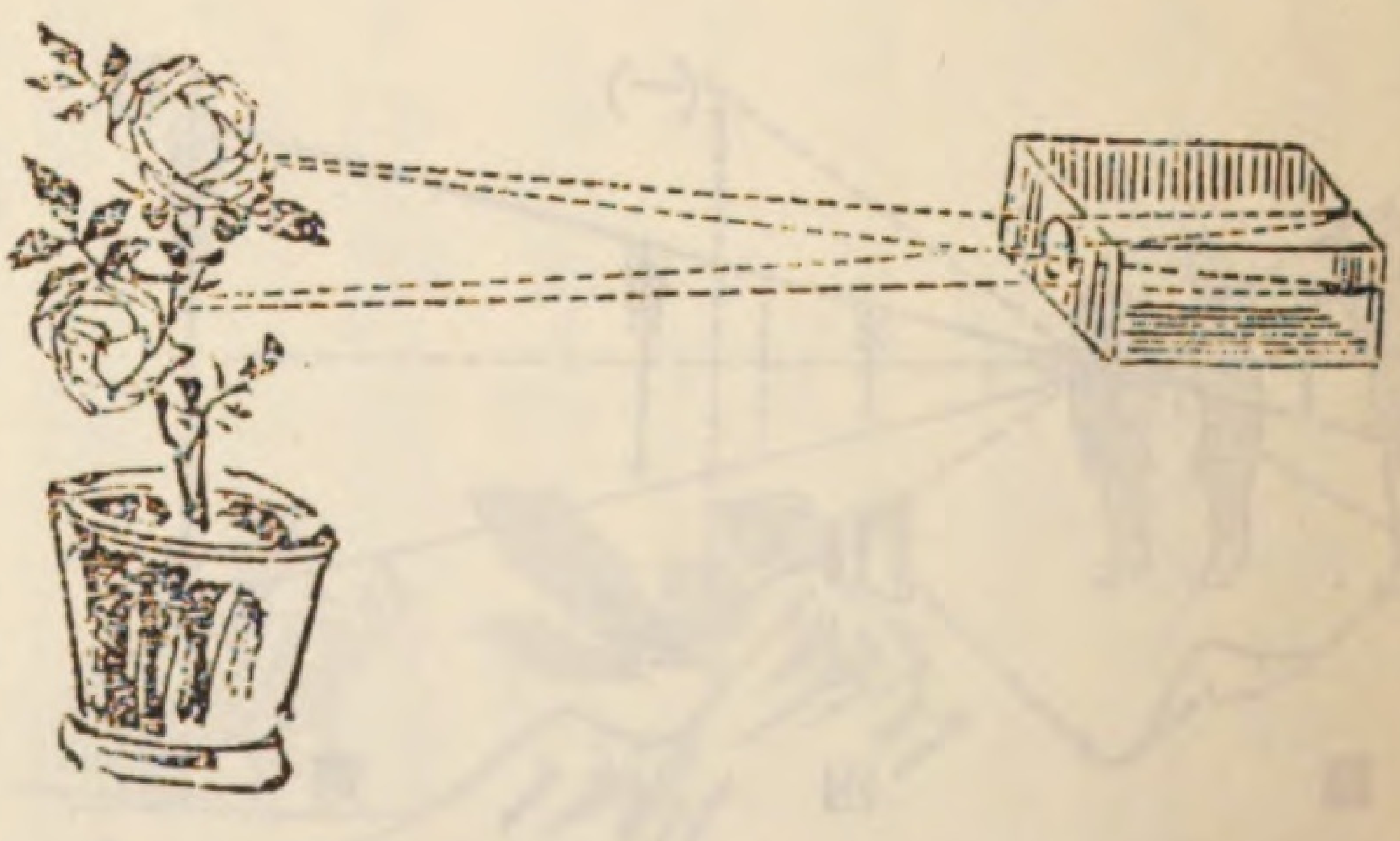
も出ださす待ちたる太郎を顧りみ、この箱の中を、上の穴より覗きて見給へ、箱の後の（ハ）の所に何物をか見給ふなるべし。

オ、不思議！前の鉢植の薔薇が、……赤い花、……青い葉、……少しも本物に違はない。薔薇が轉倒つて丸で寫眞の様ですねー。とは驚きた太郎の語也。

寫眞の様どころでなくこれが其儘寫眞さ。今朝枕元の障子に、隣りの屋根が寫つたのもこれと同じ道理さと姉のまだ云ひも終らざるに、太郎は慌たゞしく姉上大變なりと、顔色を變へて箱の中をさし覗ぞけり。如何せしやと問へば、

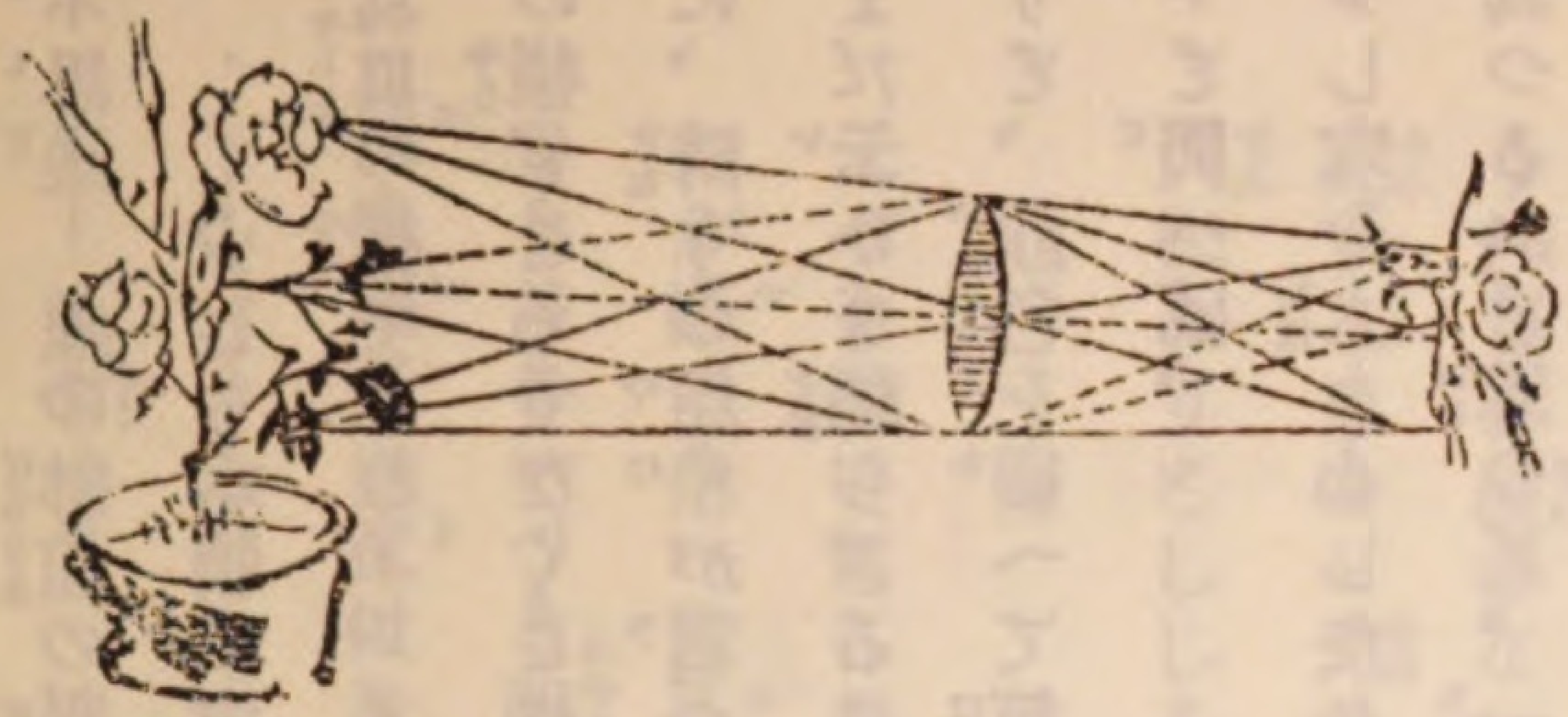
今ま少し穴を大きくしたら、中の薔薇がもつと、はつきり寫つるかと思つて、一寸此の棒で穴を觸つたら、中に何にも寫つらなくなりました、どうしましよう、何故でしよう。

それはその筈さ、始め箱の中に物の寫つたのは、花なら花、葉なら葉から反射する光線が、穴が小さくて、一通りしか通過が出來ないから、穴の所で一つに集まり、それから一とねじれして、箱の後に達するから、あんなに判然と寫つたのさ。穴が大きくなると、第二圖の様に、光線が幾様にも、分かれ〱になつて箱の中に入いるから、花から反射した赤い色の上に、葉の青い色、莖の茶褐色等、互に寫つりかさなるから、色も形もぼんやりとして、分けることが出來なくなるさ。併しそんなに失望しないで宜ひよ、いまに直ほしてあげる



第二圖

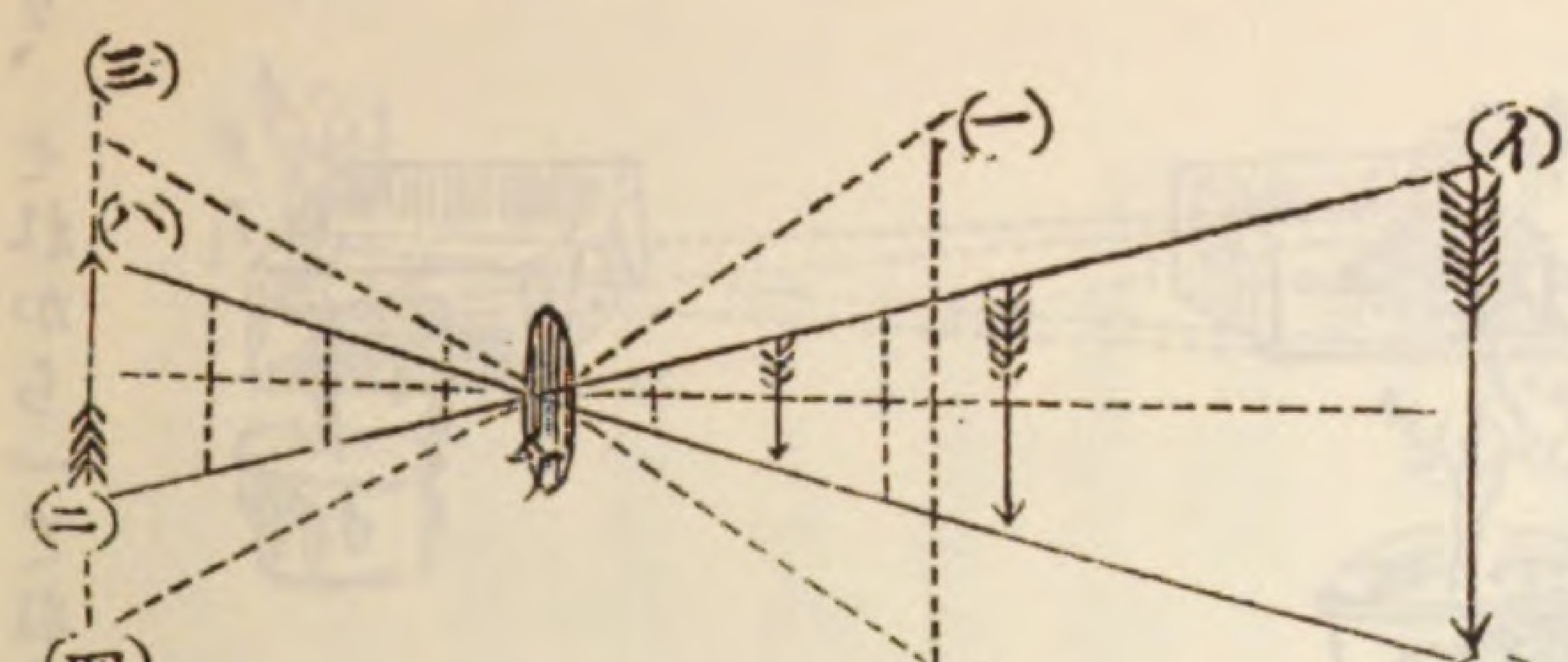
からとて、姉は一枚の眼鏡の硝子の片れを持ち來り、箱の穴にさし篏めつゝ、之で今一度見直して御覽と云ひければ、弟は喜んで中を覗きしに、姉の手品は、



第三圖

違ひもせで、形は元の如く、ありくと見へければ、不思議の念に堪へざる弟は、姉より委しき說明を聞かんと、躍る心を言葉にあらはしたり。第三圖はその說明に用ちゆる圖として描れたり。

其圖によりて一見せば、百言を並ぶるよりも、明かに光線の進行する道を知るを得べし。卽ち花より來たる光線は、硝子を通して進む中、箱の下部にて集められ、根元の葉より來たれる光線は、反つて上部に集つまり、中央は矢張、中央に集つまれるが、硝子の功能は、たゞに光線を强よくせしむるのみならず、凡ての部分より入り來たれる光線を分解して、各々の行くべき道筋を分かち、定だむるの働きあり。たゞ今一とつの云はんとすることは、如何なれば寫つりたる光線は、常に實物よりも小なりやと云ふことなり。これも亦第四圖を以て說明せんに、光線の物躰より反射するは、圖の如く、常に直線なるが故に、



第四圖

今ま(イ)(ロ)の大きなる物躰が、(チ)なる硝子を通して、進む道すがらは、正しく(ハ)(ニ)の如とくなるべ

し。もしそこに箱の後壁ありて、遮ぎらば、光線はそこに止まりて、其大さも亦た、(ハ)(ニ)の如くなるべし。然れども、若し(イ)(ロ)の物躰、硝子の方に近づくこといよ／＼近かくして、(一)(二)の所まで行くときは、その光線の進路は、又た直ぐ。(三)(四)の所迄で進むが故に、寫つる影は漸々大きくなる。之れに反して、實躰いよ／＼遠ざかるときは、影は又た小さくなるなり。

それに付き『ブロッケンの幻影』と名づくる奇態なる現象なり。ブロッケンとは、ハノヴァー國にある、高さ三千三百尺ある峰の名なるが、其の奇異なる現象の發見者は、ハウと云へる人なりき。或る日の午後彼の人は杖を携へて散歩に出で、彼處此處と徜徉して、この峰に達せしは午後四時を過ぐる正に十五分の時なりき。頃しも一陣の微風さそひ來て、ハウ氏の被りたる、帽を取らんとしければ、そをやるまじと、手を上げて、帽を壓へんとせる途端、ふと雲の彼處に顯はれたる、大の男あり。同じく帽子を風に取らせじと、壓ゆる躰也。如何で驚かざるを得ん、ハウ氏は大に驚きしが、心を靜づめ、ハテ何物ぞ怪物來たれば來れ、其正躰を見現はしてくれんと、少しく躰を屈して、更らに能く見直ほさんとせしに、不思議や彼處の怪物も、亦た同じく躰を屈しけり。アナ

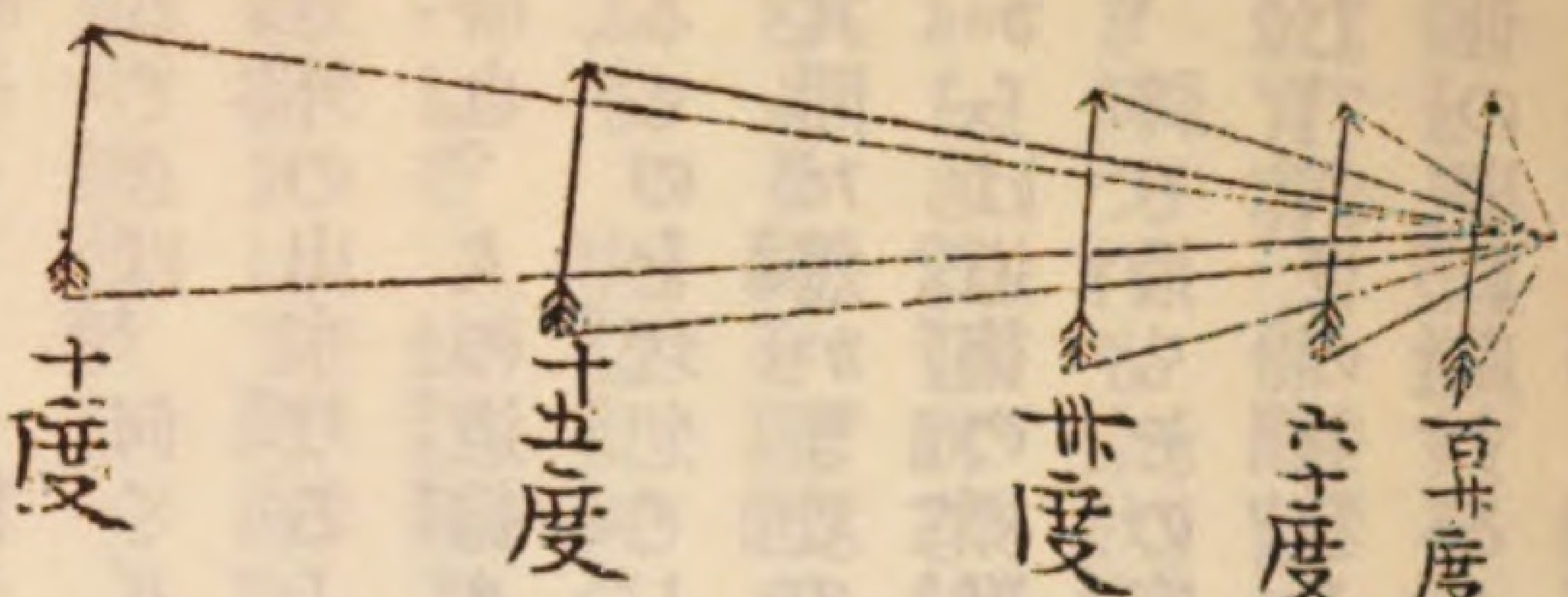


第五圖

惡くき奴かな、打ちてくれんと拳を固ため、腕を扼すれば、怪物も亦たその如くなして、露違はず己が狀に似たり。それより初じめてこは怪物にあらずして、己が容たの寫つりしことを覺とり。杖を振り、身を動かすに、一として己の爲すごとく爲さゞることなし。彼は早々家に歸り來り、翌日も同じ時刻を計り、友人三名と同じ所に立ちて、影の顯はるを試驗せんとせしに、影は少しも顯れず、三人共に失望して、歸らんとせる途端、望める幻影、又た明らかに顯はれたり。それより屢々同じ試驗を爲したるに、或るときは明かに、或る時は薄く、時には又た寫らざることさへありしが、こは時の蒸發氣の厚薄に由ることは、學理の上より知られたり。

かゝる類の現象は、たゞに此の地に止まらず。蒸發氣の度合と、太陽の光線の反射加減と、地の高低の度合等、もし反射の適度に適ひなば、何れの地にても見るを得べし。濠洲南ウエールス州にミニツドと名づくる丘あり。之れはレドナーの谷より、高さ五百呎の上にある峯なるが、ドクトル、ブリユーストル氏の知れる一婦人、花を摘みつゝ登りしは、午後二時頃なりき。他の友達は、未だ下の途にて、徐々と登りつゝある間に、その婦人は足の早きを自慢顏に、最も先きに、峰の上に登ぼり、下なる途の見ゆる所に達せし時、手に持てるハンカチを振りつゝ、その早やかりしを吹聽せんとしける折しも、己を去ること遠からざる彼處に、同じく花を持ちたる大なる婦人の、ハンカチを振るを見たり。學問なき婦人のことなれば、恐しさ云はん方なく、こは全く余の高慢心を矯めんとて、花を持ちたる怪物が、かくは誡ましめるなるべしと、山を馳せ下りありし始末をドクトルに告げしに、そは全く御身自身の影の反射せしものにして、大ひなる鏡に向ひしと、同じ理なりと、諭とし聞かしめしかば、初めて怪物

ならざりしを知りて、安堵せしと云ふ。
かゝる話の例を上ぐれば、止まる所なかるべければ、そは先づこれに止どめて、今一つの事をのみ説き明さんに、第六圖は物躰が人の目を漸々遠かるに隨ひ、其形だん〳〵小さくなり、遂には見へざるに至る、度合を示めせるなり。その度合を、物理學上の言葉にて角度と云ふ、圖中百二十度は、最も眼に近かき時の角度にして、次ぎには六十度、三十度と、眼より物躰の遠ざかるに隨ひ、その容は漸やく小さく見へ、遂ひには一度に至たり、一歩を進まば零度となりて、肉眼に見へざるに至る角度を圖に示めせるものなり。



第六圖

光線によりては、手品師が多くの手品を爲すの材料を得、學問なき人々が、屢々驚かさるゝの原因なるが、次には色のことに付き、面白き試驗を爲さんとて、姉は太郎の處を去りたり。

家政

家庭の教育（終）

宗教心

弟子は師より高きとは難く、一を學びて二を知ることはむづかし。されば何事によらず、手本は成る丈け高尚なるものを撰び、目的は出來得る丈け高き所に置きそれに進まんとして行く內、知らず〳〵上るとを得る樣爲さゝるべからず、書をかく人々は屢ゝ經驗せる所なり。美事に出來たる手本と雖も、手本によりて書き

たるものは、見る人が見るときは内に活氣とてはなけれども、天然の物に付きて畫きたる畫は、何となく面白味ありて、一種云ふべからざる味ひあり。畫きつゝあるときは、何とも思もはず畫がける所も、後より見て意外の出來なるとあるは、全く高尚なる手本の致たす所也。人の道德も亦た之れに似たることあり、高尚なるものを理想として進む人と、低き理想の人との差は其間だ短かきものにあらず。

然からば道德の標準は何を以て之に當てんやと云ふに、神ぞ最もその完全なるものなる。眞に神の存在を信じ、人世の義務を知り、未來の運命を望ぞみて、此の世の事に處する人々の心の清潔にして事業の出來ばへあるかを、一々說かんには、中々小册子の盡くす所にあらず、且つ是等は宗敎一方の問題に立ち至り、大人敎育の話しとなりて、一般の家庭敎育と稱する所のもの即ち兒童に對して說く所甚だ少くなきが故に、玆にはたゞ小兒敎育に關するその一段をのみ云わんとす。

たとへば、眞實と云ふとを、小供に敎しゆるとせよ、たとひ眞實と云ふ字の意義を、終日かゝりて敎ゆるとも、決して眞實を愛し、眞實を實行する小供とはなりがたし。しかれども嚴格なる神ありて、常に我等を警戒し、眞實なるものを愛し、然からざるものを罰することを、例により歷史によりて、とくと心に銘じ込みたる時は、水火に投ぜらるゝも敢て恐れず、眞實を守もる美はしきますら雄を生ずべし、虛言を吐きて眠むりに付きし小女が、夜中時計の音に驚きて目を醒まし、好く聞けば、その一秒を報ずる音が、ウソ〳〵〳〵と云へる如とく聞とへて、更らに眠られず、直ちに起きて、母をさまし、晝間吐きし虛言を謝し、以來虛言を更らに吐かずと眞實善良なる、小兒となりしことは、人々の好く知る話しなり。

此の子供が、いかなれば、かゝる強よき良心の耳を開らき得しかと、之を尋づぬれば、日曜學校にて、神の話しを聞けるにありしと云ふ、かゝる例は數も多けれど、要するに、神を知る程、強よく眞實を愛し、他の道徳をも堅くする道はなし、されば昔しより、有名なる敎育者、佛蘭西のルーソー氏、獨逸のカント氏の如き何づれも宗敎家ならざれども敎育と宗敎の分かつべからざるを説き給へるなり。

元より神を理想とし、善き宗敎を手本となすべしと云ふも、決して何づれの宗派により、何れの法式に隨ふべしと、始じめより、强ゆるは害あるべし。たゞ學理に照らして間違ひなく、神と崇めて恥づかしからぬ眞正の神を敎しへ、その神の命令を聞くべき良心の耳を敏とくし、人として神に對する義務を敎しへ如何なる危險なる場合に至るとも確たき道徳の上に立ちて、義務のためには一歩も退かざる堅固なる精神を養なはしめ、何事も手本を神に置き、高かき手本に向かつて進むは、頑是なき小見のためにも、事の解りたる大人のためにも、最も高尚なる道徳を践み得るの基礎たるなり。

家婦の注意すべき時候

家婦の注意の不用なる時候とては、壹年を通して見出し得べくもあらざれども、特さら注意の必要なる時は、今頃の如き温暖の時候なり。寒き時候には、第一、物の腐敗する心配なし。第二寒中には洗濯物等の手數の省ふかるゝこと、温き時候の半にて十分也。第三温暖の頃は食物にも氣を付けざればバクテリヤ等の悪しき虫生じて、流行病の原因となるべし。第四木の芽の生長すると同なじく、日に増し小供の生長も早やくなるによりて、温暖の時候には、生長を害せざる樣に、其の衣服を調度するの要あり。

（一）物の腐敗

腐敗し易きもの數多くある中にても、牛乳程恐しきはあるまじ。養生に用ちゆる牛乳を、不注意のために腐敗せしめ、之れを用ゐて、大病を起こすの愚かさは、言はざりしも、若し過ちて一滴の腐敗せる牛乳を、新鮮なるものに混ずるときは、一滴の害は、全躰に及び、腹膜炎の如き、チブスの如き、恐ろしき病、之れより發するに至らん。さらば牛乳の容物を清潔に爲すは、勿論なれども、別して之れを保存するには、注意せざるべからず。



小供のある家にて、今朝の牛乳を夕刻迄保存するか、或は今夕の牛乳を明朝迄保存せんと欲するときは、第一圖の如き、罐を作くり、之れに入れて、冷水に冷やし置くべし。之れは錫、若しくは銀等にて、茶入れの罐の如く作くり、それに持つべき手を付け、その手の端は、圖の如とく曲げ付けたるものにて、罐の倒をれざるため、手に紐を結び付け、手桶等に繋ぐに便ならしむ、錫や銀は、最も好く寒温を導くものなるが故へに、物を冷やすの目的には、最も適せる也。牛乳は最も早く腐り易すければ、冷やし置かざるものは、決して用ゆべからず。

（二）洗濯物

人の目にこそ見へざれども、人の躰の皮には、數も數ぞへ得べからざる小窖ありて、たへず蒸發氣を發散するが故に、肌に接せる下衣を、屢々洗濯せざれば、その發したる汚たなき物、布に閉ち込み、遂に皮膚の穴をも閉ぎて、病氣を起こすに至る。中にも温暖の氣候に向かひては、その汚されたる衣服、臭氣を發し、他人に對しては失禮となり、自分のためには、不健康

なること云はん方なし。さてその洗濯を爲すに當り、修繕の精粗と、遲速との別つによりて、長がく用ひ得べき衣服を早く損じ、早く損ずべきを長がく使用することは、驚くべき差を見るべし。諺に必要なるときの一尺の布は、不必要なるときの十丈にも勝さると云へるは、實に主婦の心に銘じて、忘るべからざる言葉なり。たとへば、靴足袋の如とし。一と目二た目破ぶれたるとき、繕くろへば、そのまゝにて又た長がく穿がつべけれども、破ぶれし以來、一日二日と延ばし置くときは、遂にばら〳〵に解け行きて、針もかゝらざるに至たるべし。金巾のシャツ等の如きも、洗濯の前に布を當て、繕ろい置くと、洗濯の後にて繕らふとを比らぶれば、一年續づくと半年にて損するとの差を見るべし。程もなく入梅も來たるべければ、汚でれたるものを、其儘行李につめ置きて、黴を生じ、使用に堪へざるに至たらざる樣、豫かじめ洗濯して、用意を爲しをくべき也。

(三)食物のこと

昔しより家に病人の多く生じて、堪へ間なき年を、厄年と云ひて、年の惡しきが如とく云ひなし來りしが、若し年に生命あり、神主あらば、さぞめいわくがりしとなるべし。そは家に病人の生ずるは、其原因、年にあらずして、他にあればなり。例とへば臺所の掃除あしく、塵溜の塵堆かく、溝に汚水の充滿せるより、流行病は、一家族を襲ひ、身躰の沐浴を怠たるより、皮膚病は生じ、運動の不足より胃病は生ずる如とく、年の厄年なるにあらずして、注意の厄年なること多し。衣服、住所、身躰の淸潔は、最早や云ふ迄もなく、必要中の大必要なれども、特とに今日の注意を呼ぶべきは食物の攝生なり。世に一文吝の百錢失しなひと云ふことあり。これは僅かのことに、吝嗇なるが原因にて、反て大ひなる損失を招ねくに至たるとあるを誡ましめ

しものなり。コレラ流行の時などに、屡々聞く話しなるが、腐敗せる飯を捨つるを吝みて食せるよりコレラに襲はれ、或は黴びたる菓子を食して、遂には不歸の客となるもの、擧げて數ぞうべからず、之れは經濟に似て、反て不經濟の甚だしきものなれば、コレラ流行の徵ありけるが如きは、別して心得べきとなり。

（四）衣服の調度

世上一般の流行とは云へ、實に小女のために、氣の毒千萬なることあり。そは此の頃、東京の風習の一つとして、小女に早くより大なる帶をしめ、長き袖の衣服を着せしむることあり。こはたゞ母の慰さみ心より生ずるものにして一は子女を飾ざらしめて、己が目を喜ばしめ、一は他人に誇らんとの、無益なる名譽心より生ずるものなり。美わしき衣服を衣せしむれば、之を汚さんことを恐るゝが故に、野外の隨意運動のごときは小供に必要にして、健全の道となるべき遊戯は、一せつ禁ぜざるべからず。たとひ之れを禁ぜざるとするも、大人の袖よりも長がき袖は、いかで小供の自由を妨たげざるを得べき。胸幅より廣ろき帶を、下からざる樣にしめんとするには、結果として胸部を堅たく窘縮せしめざるを得ず。かくては小供のために如何に氣の毒ならずや。昔かしは、お姫樣の帶にても、貴婦人の帶にても、今日の四五才の小女がしめ居る如く、廣ろくはなかりし。帶は前の開らかざるを目的と爲せば、決してかゝる廣ろさは入用の筈なし。能ふべくは袖も不斷は筒袖になして、小供の自由を妨げざるを計りたし。これ小供のために。大なる慈善にして、將來の丈夫淑女を作くるの道たる也。

時候物の料理

珍つらしき物品、珍らしき食物を求とむるは、人情なるべし。鯉のなき時候には鯉を求とめ、筍のなき時候

には筍をほしがるは、廿四孝時代にはあらずして、反てかゝる好のみは、今日こそ多くなり行くを見る。さればにや、東京近傍の百姓は、收穫の多きものを造くらんとはなさで、いかにもして時候外のものを作らんと、骨を折り、或は寒中に筍を生やし、春猶ほ淺さきに蕗、豌豆を市にひさぎて、算用外の利を得んとすこれは全く東京市民の需要に隨たがひて生ずる結果にして、如何に一般が贅澤になり行けるかを見るに足るべき也。されども、こは或る一部の流行とも云ふべきものにして、少しく心ある夫人は、かゝる無益なる驕りはなさずして、反て忌まはしく思ひ給へるは、殊勝なることなり。かゝる經濟心ある眞家婦のために、少しく時候ものゝ料理方を記し、一家經濟の助すけと爲さんとす。

鰯の卯の花ずし

此の頃は、市上鰯の聲ならざるはなし。價も隨て安すし。之を需とめて卯の花ずしと爲さば、味ひも中々に美なり。今ま其の作り方を記るさんに、新鮮なる鰯の腹を開らき、腸と骨とを拔き頭をはね、水にて濯ぎ、籠に並らべ、上より鹽をばら／＼と振り裏返へして又た鹽を振り、之れを酢の入りたる鉢の中に入れて、暫時濕し置かば、肉も皮も白く軟かくなるべし。其柔らかく漬りたるを見計らい、左に記るせる法に隨がひ。豆腐のからを調理したるを包み、輕ろく壓しを置くべし。

豆腐のからを磨り鉢に入れて摺り、之れを味噌こしに轉し、桶に上せて、上より水を濺そぐときは、餡の如とく、滓は上に殘り、好き所は下桶に流れ込むべし。之れを布袋に入れて絞ぼり、水氣を去り、堅魚たしの醬油に砂糖を加わへて、いり付け、之れを先の鰯にて包む也。

鰯の味噌あへ

鰯の頭と、腹と、骨を去りて、能く洗らひ、擂鉢に入れて能く擂りつぶし、之れに酢と、極々少量の砂糖とを加はへ、酢の滿面にしみ渡たりたるとき、味噌を加わへて又たよく擂りまぜ、湯出たる葱、わけぎ、大根蕪、にんじん等をあへて食用となすに、味ひ誠にうるはし。

鰯めしの二法

鰯飯を製するに二法あり。一は鰯の頭と腹わたとを去ること上のごとくし、之れを煮へ上りて、火を引かんとする飯の中にさし込み置くときは、飯の蒸し上る迄には、鰯も蒸し上るが故に飯器に飯をうつさんとするとき、尾をもちて引き抜かば、骨のみ抜くるを以て、殘りたる鰯の肉を能く攪き廻わし、食鹽を少こし入れて、茶碗に盛り、かけ汁を掛けて、食くす此くするときは、大に手數は劣ぶくを得べけれども、小骨大に殘りて、老人小見には劍呑なり。安全なる一法は、面倒ながら、生の内に骨を一々手にて抜き去り、擂身となしをき、同じく飯の煮へ上がりて、火を引かんとする前、飯の上に一面に散布すべし。

かけ汁は、堅魚節たしのすまし汁を用ひ、好みの野菜物を混じて用ゆべし。

鰯のてんぷら

醤油一合、味淋一合の割合にて、混和したるものを、半分になる迄煮つめ、その中に骨を抜きたる鰯をひたしをき、およそ半日もたちたるとき、鰯を引き上げて籠に上せ、水氣のかわきたるとき、うどん粉にて包み、てんぷらとなし、又た粉につゝまずして、其まゝ油にてあげ食すべし。

鰯のかば燒

又た先きの如くして漬けおきたる鰯を、から〳〵になる迄かわかし置くときは、温き日にても、數日間保存し置くを得べく、之れを燒きて食するときは、かんば

しき燒魚を得べし。

鰯の漬物

此の頃の如とく、鰯の多き時候には、之れを漬物となし用ゆるときは、目先き變わりて又た面白し。之れは鰯を醒ぐさがりて、餘り好のまざる人にも、臭み少なくなるが故に、味ひ適すと云ふ。其の漬け樣は、米の糠と鹽とを等分に混和し、水のかはりに白水にて練り少しじたくくする位を度とし、之れに腸を去りたる鰯を入れ、一二日の間漬けおき、鹽氣のしみたるとき取り出だし、糠を洗らひ、生酢又は燒きて用ゆべし。

鰯の醬油

蠣より蠣醬油を取り、蝦魚より蝦魚の醬油を取る如く、鰯よりも醬油を取り得べし。その製法は、善良なる鹽を、水にて溶かし、塵のなき樣に布にて漉し、之れを鍋にて煮つめ、火より取り下ろし、冷めたる時、燒きもの、若しくは硝子の瓶の中に入れ、その中に鰯を入れ、嚴しく口をなして、長くそのまゝに置くべし。鹽の强よきものは、早やくして魚の肉溶け、鹽甘きものは、長して其肉溶解すべし、其時取りて、醬油のかはりに用ゆるときは、堅魚節等のだしを要せざる、美味なり醬油となるべし。

鰮魚の分拆（明治十八年五月衛生局分拆）

鰮魚	水	蛋白質	脂肪	鹽	合計
本邦産	七〇、三五八	三、三八九	六、七一六	一、六三七	一〇〇、〇〇〇
同鑵詰品	七三、一八〇	二、〇六五	エキス 三三五 一二九	一、六三〇	一〇〇、〇〇〇

職業案内

婦人の職業の必要なること今更改めて申すまでもなき事ながら、此頃に至り尚更に其必要なるを感ずるに至りたり。

昨年の下半期より日清兩國端なく事を朝鮮に起し、終に干戈相見ゆるに至り、我陸海軍の將校以下士官下士

兵卒に至るまで遠征の途に上りたるが、下士以上の軍人の家庭に於ては月々一定の給料を政府より受け納め、差したる不自由なきも、豫備、後備の兵士の家庭には、戰爭のために尠からざる家政の不調を來したり、豫備、後備の人は大抵家を成し、妻を有し、子を育するか又は親兄弟を養ふべき責任ある位地あるものなれば、一朝兵事に徵收せらるゝに於ては、今まで其親子、其兄弟、其の妻眷たるもの、主人の脛一本にて稼ぎ働き居るを賴み居たるに、突然其主人は遠方へ出立せざるべからざる運命に遭遇するに於ては、富貴榮達に生活せざる家庭の外は、隨分途方に暮れしものめづらしからず、家政の困難なるよりして其家人は內職に從事し、日々孜々として之をつとめ、生計の業としたるものの多かりしが、俄の事なれば內職の手業に慣れざるより、需めて適當の職業なきか、又は職業あるも着手して其功を奏せず、今更の如く手業に鈍かりしを慨歎せし人々往々聞く所なり、殊に軍夫の妻女又は家人たるは、其生計にほと／＼困却し見るに忍びず、聞くに氣の毒に堪えざるもの甚だ多し、これ必竟平生職業とやいふ事に志を向けざる爲なり。

啻に戰爭中のみに限らず、戰爭によりて陣歿又は病毒に斃れし人々の家庭は、決して是迄の如く主人の力を賴とせず、奮勵一番、女小供の細腕と雖も各々額上の汗を以て生計とするの外なし、女小兒の力にても必らず生活は夫相應に遣つて行かるゝなり、男子の力ならでは日々を過すこと協はずと自ら卑め自ら其力を輕ずるは意氣地なき沙汰と申すべし、職業は獨立を意味し、獨立は品行を意味し、良心を意味し、節操を意味すとは此邊の消息たるを忘るべからず。

右は戰爭のありし爲のみならず、戰爭に關係なき凡ての人の家庭に於ても同じ理なり、主人の力のみにて衣食すると心得あるは、大なる心得違なり、人事には不

時の出來事あり、社會には不期の災害多し、されば主婦若しくは家人たるものは主人が在と不在に係はらず、立派に生活し行かるゝやう平生の用意が肝要なり、くれ〴〵も平生より職業を試みて主人健在の時は、家政の助勢を爲し、若し又萬一の不幸に遭遇せば、獨立の力をもて家族を支ふるの手段なかるべからず、故に職業は平生無事の日より試み置くにあらざれば、一旦事あるに當りて躊躇逡巡するの迷惑に陷るべし、ゆめ〳〵此事を忘れ玉ふ勿れ。

目下婦人の内職は餘程增加したり、殊に日清戰爭の始りし以來、内職の數非常に增加せしより貧民社會の子弟を閑なからしめたり、譬へば軍用乾飯の布嚢を縫ひ、或は彈丸入の紙箱を貼り、或は草鞋の紐を通し、或は軍用靴足袋をぬひ、戰爭錦繪の彩色を施す等其品擧げて數ふべからず、戰爭用を取除としても、これより市中にある内職は麥藁帽子を編む仕事、或は團扇の骨をけづり、又は貼る仕事、或は夏座蒲團をあみ、或は釣道具に用ゆるウキを磨く仕事、或は凉提灯の骨をけづり、或は「メリヤス」縫の仕事、或は「ハンケチ」縫其他「マッチ」を張り造花を製し縫箔をなす等其他の内職は、夏季のみに限らず、何時にてもあるなり、但し玆に十分注意し置きたきは婦人小兒の内職は、大概一日五六錢より十二三錢に止り、其上に至らば夫相應の資本を要するもなれば、一日に一圓以上などゝ廣告するものは着實ならざる職業たるを證す、諸卿は必らず彼等のために欺かれ玉ふな、地方の人々は勿論、都會の家庭と雖も、婦人の職業として、養蠶、紡績、機織、養雞、牧畜、園藝等は適當ならん、併し是等は人烟稠密の所にては出來がたき場合あり。

社交一斑

流行の栞

鐵瓶　　春夢

家庭の内にては鐵瓶は随分緩急事に應するものなり、鐵瓶は啻に實用品として家庭の忠義者たるのみならず、家庭の賑やかなるものに數ふべし、或る家庭通の曰く、家庭のさびしさは第一老人のなき事、第二小兒のなき事、第三火種のなき事、第四談話のなき事、第五時計のなき事と、余は甚だ此語に敬服す、而して余に又之に加ふるに鐵瓶を以てせんとす、鐵瓶が火鉢の上にかゝり、始めは蟬の聲となり、後には松の籟となるに至らば、座敷の内何となく賑なり、又鐵瓶の德たる、(第一)座敷に[illegible]を添ふ、(第二)鐵瓶にて沸したる湯は煎茶に適し、(第三)長くつかへはつかふ程其者の直段が出る、(第四)湯の沸くに藥罐より遅くも、曾て藥罐の如く浮薄女との誹謗を受けず、湯のさむることを遅ければ、經濟上に利あり、これ鐵瓶が藥罐にまさる萬々たる所以なり。

目下如何なるものが流行するかと言へば、京都製第一位を占め、南部製之に亞ぐ、殊に龍文堂は天下に比類なく、非常の勢力を以て流行すれど龍文堂には頗る僞物多し、蓋の裏に其文銘彫刻しあれども、素人には分別し難し、凡て流行の形には色々あり、角形も流行し、丸味も流行し、平たきも流行すれども、丸味長形のもの多數なるが如し、其蓋に至りては、殆ど下と同じき大きさにして、最も重量のあるものを尙ぶ、模樣は鐵瓶に意氣なるものは皆無と申しても宜しく、古雅にして滋味津々たるを以て最上とす。

筆の序に鐵瓶購求者の爲に記さん、鐵瓶を求めんとならば、成るべき新しきものを厭ふべし、新らしきものは直段も割合に廉にして、外見も能けれど、一ヶ月も經過せぬうちに、中に引きある合藥剝落して鐵氣を生ずるに至る、然れども古道具店の狹い所か、夜店などにては、新しき物をワザ〳〵古物に仕立てゝ客を瞞着せんとする輩多ければ必らず油斷あるべからず、鐵瓶の口や内を能くしらべ、眞に湯垢のつきて十分つかひふるしたるものならば、少々は直段高くとも德なり、鐵瓶の内に鐵銹の斑點あるものは避くるが宜し。

生地の茶盆

上等品に至りては無論唐木に上こすものなきも欅のせんまい杢、又はく

すべ、又は櫻か、平民的に至りては染製大流行、形は好々なれどアッサリとしたる彫刻物人氣あり、塗盆は追て案内することあるべし。

日下の花簪

天然の藤は未だ早けれど、人々の花簪は目下藤を以て第一とす、殊に花籠に藤の挿込を屢々見受くるが可憐誠に掬すべし、躑躅もよし、あやめもよし、牡丹は時を厭はず、殊に昨今は好時節なり、あぢさゐは色退せ易く變りやすきためか、少女の頭にもうゆるもの稀なり。

袷と單衣との間に着るべき衣服

春去り夏來らんとし、時下袷着に肌心地よき時候なり、昨今は袷に袷羽織に適すれど、フラチル又は「セル」の上に袷羽織か厚地の單羽織を着するも面白し、左に其流行を記さん。

フラチル——フラチルに二種あり、其一を英吉利製、其一を獨乙製とす、英チルは地質概して澁く其色亦淡泊なり獨乙は之に反して地質厚味にして其色濃厚なるもの多し、而して目下流行の傾向あるは英チルにして其柄合は山糸織又は京お召の珍柄を摸範として此道にすばやき白木屋が外國に注文したるものなりと聞く、今其の新柄二三種を記せば(男物)白茶の棒縞、肉色の微塵柿鼠の一の字くづし、千歳茶のはけ目、淡鼠の微塵、鐵色のみぢん、うす鼠の棒縞、(女物)貴族鼠の立かすり、黑鳩のかすり、淡れづみの一枡、鼠と茶のむしろ織、れづみと濃茶の擦子、銀れづの立縞、千歳の小豆立じま、濃茶地の鼠立じま等、頗る華美の趣ありて令嬢に向くべきものは濃ねづみの紋織、茶のかすり、肉色に小豆棒じま、鼠地にかはり縞、肉色、白、藍鼠、茶、銀れづみ等のかはり縞なるが如し、獨乙製も需用なきにはあられども、柄と色共に英チルに數籌を輸するを以て英國製の右に出づること能はず、直段も亦安廉なり(英製一ヤール六十七錢、獨乙製五十八錢位但し衣服一領に要する尺は六ヤール半と積れば、前者は四圓三十五錢五厘、後者は三圓七十七錢となる)

セル——人々の嗜好によりて一樣ならず、則ち男女と通じて其流行の品を掲ぐべし、白茶のはけ目、鼠、鐵、黑のはけ目にみぢん、淡れづの大名萬筋、千歳の大名、銀れづの小紋、淡れづみ小豆の小紋、裏葉柳地にかはり小紋、藍鼠地に白棒、うす青竹に珍立じま、白地に黑のやなぎ縞等を重なるものとす、其の直段は(上)六圓三十錢乃至七圓二十錢(中)五圓二十錢乃至六圓二十錢(下)四圓乃至五圓。

單羽織

昨今は未だ袷と袷羽織といふ時候なれども、袷の上若しくは「セル」が「フ

ランチル」の上に着すべき單羽織を茲に案内せんに紋附にては例の七子及黒羽二重にして（絹は少々早し）而して紋の個所は三個所と五個所伯仲の間にあり、次に縞物は越後産の吳撰織にして、柄は白みぢん、白せん筋、白萬筋、鼠の大名或は鐵、あか鐵、鼠の無地とす、（代價六圓乃至六圓半）次は市樂にしてうす鼠の小紋、同じく微塵、鼠の萬すぢ大名、肉色のはけ目、或は鐵無地、代價六圓半乃至八圓半）次に少しく地質の薄くして暑中まで着用せらるゝ品は例の博多絽なり、其縞は千歳の萬筋、うす鼠の千筋、うす柿の萬筋くづし、紺地に鼠の大名萬すぢ、等（代價六圓乃至七圓半）

次に價の廉にして平民的の趣あるは、秩父縞の白、又は白茶の大名萬筋なれど、今より六月中の生命なりと知り、玉へ次は銘線縞にして紺地に白の大名まんすぢに限るが如し（價は二者共二圓より三圓に至る）

日清戰爭と躑躅及牡丹

躑躅及牡丹も日清戰爭の影響を蒙りぬ、これも亦流行なるかな。

大久保躑躅は本年頗る上出來にて日清戰爭の躑躅人形廻り舞臺大仕掛の細工物を出し一昨十七日より開園同所一帶の躑躅は來る廿八日の日曜日頃より追々咲初め來月初旬は能き眺となるべし新粮園、新粮支園、竹木亭、中村園孰も躑躅人形（重に日清戰爭）に工夫を凝せり。

『新粮園』大寺少將百尺崖奮戰の場劉公島内丁汝昌外二名自殺の場（以上廻り舞臺）百尺崖樋口大尉孤兒を抱て奮戰の場○先代萩床下の場、○牡丹燈籠萩原庭先の場。

『新粮支園』に李鴻章馬關談判の場○原田重吉玄武門の場○金州城小野口工兵城門破壞の場○同金州城軍夫下山勇吉働きの場○二十四孝御殿の場。

『竹木亭』は忠臣藏討入の湯○原田重吉玄武門開門の場○川崎軍曹大同江を游泳して敵船を奪ふの場○歌舞伎座の千代萩閣、九兩優對決の場。

『中村園』は市村座新狂言中藤村大尉幷に別當有馬清藏引上の場○陶器人形箱庭一千餘人の大戰牛莊占領後奉天府へ進軍の場○朝鮮征討加藤清正虎狩の場○鏡山於初烏鳴き思案の場○清水舜臺清玄櫻姫對面の場。

又城北の牡丹と躑躅駒込團子坂の植惣菊花園にては巾十一間の常小屋に躑躅細工にて「百尺崖樋口大尉孤兒を抱ひて奮戰の圖」を造り大尉は團十郎似貌にて日本兵、支那兵もあり中々見事に出來たり此他數種の牡丹五百鉢と躑躅二百餘鉢を飾付け今二十日より開園、萬風園にては今度園主が關西地方を探りて奇石珍木の盆栽數百種を購入し來り之に從來の盆栽等を取交ぜ來る廿八日より開園、駒込動坂の植木屋「ばら新」にては從

來の名花二百餘種に自國新花四十種あり目下雨中、世界圖、寶鼎、國山の月等盛りに咲き初め尙は櫻草數十種、石南木、洋花にてはシ子リヤ、ジヨロ子ムの類、巾着草の種類等何れも美事に咲き初めたり薔薇の各花にては御帝、天地海、大山吹、極黄大輪抔近きに咲き出すへく牡丹も數百を飾り付け來る廿七日より開園。

日本婦人服米國に流行す

シカゴ府大博覽會以來我國の文明も漸く外人の知るところさなりしも歼は唯奇麗の陶器、茶、絹絲を出すの國なりとして知らるゝ位に止りしが昨年日淸交戰以來は日本を尊敬するの氣風至るところ頗に興り何も日本かも日本さ一夕の宴會咖啡の席上にてすら日本人の歡待せらるゝを實に甚しく殊に可笑しきは日本婦人服の流行にて彼等に取り服裝の如何にも不恰好なるに拘はらず婦人は多く之を宴會の席に着し事々物々戰勝國さしての日本を誇賞することさ恰も自國の自慢話を爲すに異らず左れば當時米國婦人交際場裏にて日本婦人服を着せざるものは同好の顰に傚はずさて大に排斥せらるゝ程なりさ此頃歸朝の人は語りぬ。

春夢曰、來五月は凡ての流行品、春より夏の氣候に變遷する時期なれば、次號より成るべく精しく且く廣き區域に於て愛讀諸君へ報しまゐらせんさ期す。

日用品物價（四月廿　日改正）

◎白米小賣相場（一圓に付）　一等白米七升七合●二等白米七升九合●三等白米八升三合●四等白米八升七合●五等白米九升一合

◎雜穀　●南京大豆一斗七升五合●同白小豆一斗四升五合●地廻韭一斗五升●同背大豆一斗七升五合●粕壁瀨色小豆一斗四升●目無白さ一斗二升●本石大豆一斗六升七合●南部大豆一斗七升●越後大豆一斗五升五合●室蘭黑豆二斗〇●川越豌豆一斗五升●川越白さ一斗二升●本場平豆一斗六升●北海道背豌豆一斗六升五合●鶉隱元一斗六升●室蘭小豆一斗三升●小手小豆一斗四升五合●川越本場金時九升○●庄內平豆一斗三升五合●銚子隱元一斗〇五合

◎鹽　赤穗三俵六分五厘●大鹽拌に八家三俵七分五厘●本齋五俵二分五厘●新齋六俵三分

◎糖　赤糖上銘六分二厘●金上上銘六分五厘●攝州白糖九分九厘●金上軒九分七八厘

◎花座類（十枚に付）

●京二間形物上	五圓	●無地上	二圓七十錢
●同次	四圓三十錢	●同次	二圓三十錢
●同八分石上	五圓	●備五八二間無地上	四圓三十錢
●同次	四圓三十錢	●同次	四圓
●同吉原上	五圓二十錢	●同花上	四圓廿錢
●同次	四圓四十五錢	●同次	四圓
●同圓七上	四圓八十錢	●同八配花上	一圓十五錢
●同次	四圓三十五錢	●同次	一圓五錢
●京二間無地上	七圓十錢	●同新形上	一圓二十錢
●同次	五圓十錢	●同次	一圓

同花無地上　八圓
同次　五圓七十錢
同一間花上　二圓五十錢
同次　一圓八十五錢
同新形上　二圓五十五錢
同次　二圓十錢

◎蚊帳(一張に付)

△宮村鯨九寸五分上々
(割縧紅麻三分角綴練縲大丸鈑附)

四六　四尺八寸足　二圓三十八錢
五六　四尺八寸足　二圓六十七錢
六七　五尺足　三圓三十五錢
六八　五尺足　三圓七十錢
(六八方一文字入十四方十文字入)
六九　五尺二寸足　四圓十二錢
七八　五尺二寸足　四圓十六錢
七九　五尺二寸足　四圓四十八錢
七十　五尺五寸足　五圓
十四方　五尺五寸足　六圓三十一錢

△宮村鯨九寸五分巾極上々
(縧紅麻三分割角綴練縲大丸鈑附)

四六　五尺足　二圓五十九錢
五六　五尺足　二圓九十一錢
六七　五尺足　三圓五十五錢
六八　五尺二寸足　四圓二錢
(六八方一文字入十四方十文字入)

同無地上　一圓十五錢
同次　一圓
太非五八二間上　二圓八十錢
同次　二圓五十錢
同三六二間上　二圓九十錢
同次　二圓六十錢

六九　五尺二寸足　四圓三十五錢
七八　五尺二寸足　四圓三十七錢
七九　五尺三寸足　四圓八十二錢
七十　五尺六寸足　四圓九十錢
十四方　五尺六寸足　六圓七十二錢

△沖風鯨一尺巾上々
(縧紅麻三分割角綴練縲大丸鈑附)

四六　五尺足　三圓十一錢
五六　五尺足　三圓四十八錢
六七　五尺三寸足　四圓四十三錢
六八　五尺三寸足　四圓九十一錢
(六八方一文字入十四方十文字入)
六九　五尺三寸足　五圓三十七錢
七八　五尺三寸足　五圓三十五錢
七九　五尺三寸足　五圓七十七錢
七十　五尺六寸足　六圓四十四錢
十四方　五尺六寸足　八圓七錢

△沖風極上々無類品鯨一尺巾
(縧紅麻三分割角綴練縲大丸鈑附)

五六　五尺六寸足　四圓三十三錢
六七　五尺六寸足　五圓二十二錢
六八　五尺六寸足　五圓七十四錢
(六八方一文字入十四方十文字入)
六九　五尺六寸足　六圓二十二錢
七九　五尺六寸足　六圓七十七錢
七八　五尺六寸足　六圓二十七錢
七十　六尺足　七圓五十九錢
十四方　六尺足　九圓五十四錢

△綿蚊張の部
(縧紅木綿極上々)

○五六　四尺足　四十九錢五厘
六七　四尺足　六十錢
六八　四尺三寸足　六十八錢



六九　四尺三寸足　七十五錢
六十　四尺三寸足　八十一錢五厘
七十　四尺六寸足　九十四錢
十四方　五尺足　一圓廿三錢九厘
十六方　五尺足　一圓五十四錢
十四方　五尺足　一圓八十七錢

△木綿蚊帳極上々飛切
(縧り紅木綿附)

○五六　四尺足　五十二錢五厘
六七　四尺足　六十三錢
六八　四尺三寸足　七十二錢五厘
六九　四尺三寸足　七十九錢五厘
六十　四尺三寸足　八十六錢五厘
七十　四尺六寸足　一圓一錢
十四方　五尺足　一圓三十一錢
十六方　五尺足　一圓六十三錢
十四方　五尺足　一圓九十八錢

雜録

余が友の愛らしき忘想（一）

鐵斧生

吾が知れる友のうちに面白ろき一人の青年ありて、常に其身行末の家庭の樣など忘想に描きつゝ、之れを人に語りて夢みる如き樂とはなしぬ。冬の夜の長きを苦しむ時など、われ此の友と火鉢をかゝへて罪なき談話に土曜日の夜を深かす事も少なからざりき。

或る夜の事なりけり、彼れが其の涼しき眼をあげて何處ともなく見つめつゝ言ふを聞けば。

吾は都に老ひんとは思はず、希くは林の蔭に此の骨を埋めたし。僅かに五十年の命ならば、塵を吸ふて送くる事の如何ばかり愚の至りぞ。

妻か！妻ならば強壯なる田舍の乙女こそ願はしけれ。綺羅を喜ぶ都の娘を見る時は、無妻主義を唱へたく思ふ。

羨ましきは農夫なり。殊に年若き農夫なり。若き妻持てる農夫なり、吾は妻持て例の旅行とかに上らんとは思はず、停車場に人の妬みを受けて何かさん、温泉場に羨まるゝが何の自慢ぞ。

寧ろ若かんや、夕暮の煙靜に野をこむる時、新月低く森に傾く頃、鋤を擔ふて家路遙かに歩みくれば、もるゝ吾が家の竈の赤き火、火にうつる彼の女の顏の罪のなきに。

されど悲ひ哉これ吾が忘想に過ぎざらん。吾が家は君も知る如く海の傍に在り、吾が家は少しく富めり。自から鋤とらずにも食ふに困まる事なき也。

年老へる母は曰く早やく妻持たずやと、孫の顏が見たしと、これを聞き、父は墳墓の下に例の哄笑をやもら

し給はん。

吾の答は何時もの如し、妻とかや、妻とかや。妻とは如何なるものぞと。

母には斯く無頓首に言ひ放てど吾れ能く妻なるものを知れるなり。窃かに心當りを探ぐらざるにもあらず、されど今更ら撰擇に困まらざるにもあらず。

美しきを撰ばずと人は言へど、美しき妻に越したる事あるか。たゞ願ふは心も共に美しき事也。二つ一つならず寧ろ心を撰ぶまでなり。

更らに撰び度きは其の健康なり。

庭に草花の多きを願ふ。今とても少しはあり、されど倘ほ足らぬ心地す。草花ほど優美なるはあらじ、春、秋共に此樂ほど樂しきはあらじと思ふ。葛をうるさく思ふは非なり、壁などにはひ上ぼり、書齋の前につるの行衛の迷へるなど、青々として夏は涼しさを加ふ。

吾が母は船を危しとて嫌ひ給へど、吾れ若し妻もたば子供の生れざるうち、已に一二艘の小舟を門前の岸に繫ぎ置く積りなり。妻若し否まずば共に乘りて四十分計りを波の上の壯快なる娛樂に費すも惜からじ。

願くは家を圍むに生垣を以てしたし、吾が家今も然り、されど倘ほ物足らぬ處あり。杉のみは不可、竹にそ願はしけれ、筍のあちこちに頭をもたぐる程、うれしきはあらず。

夏の日よけは葡萄棚に好ものあるべしとも思はれず。青葉いやがうへに重なりて井戸の邊り一面に涼しき蔭をなげ、秋近くなりて露の凝りたらん如き果の房々と下るを見る時、吾が妻愛らしき小供を背をひ來りて、一と房二た房小供に撰ばすなど妙ならずとせず。

かく語り來りし時、余窃かに友の顔をみれば、友の心已に山河百里の彼方に飛びたらん如く、眼は窮空を見つめ見たるぞ可笑しき。

一兵士の通信

指折り待ち兼ね居りし當日は來り候午後九時半出發の預定なるより皆其の時の早く來りかしと幾度となく引き出す時計の針進まざるをつぶやきつゝ彼處に一團此所に一團と語るとも無く話すとも無く打ち集まりて室內は欠伸の百萬遍を繰り返し居り申し候詮方なければ軍歌を謡ふもの淨瑠璃を語るものも有之候らへ共皆一句切り半鎖りの後は大欠伸の打止めにし一秒一秒を刻み行き居り候實に此の日の長かりし事は筆にも口にも述べ盡くし難く候程にて九時半の聞へし時の嬉しかりし事御察しくだされたく候。

第○中隊整列―の一聲は異樣に響き渡たりて舍前は忽ち粛々たる一列の兵士今はたゞ中隊長が發する一喝の號令をまつ耳に候吾が中隊は近衛師團初發の隊に候らへば中隊長の心配もなか〳〵にて他中隊の摸範ともなる樣と餘程苦心せられしだけ至つて靜粛に至つて手早く若し出發等の當日にあらざりせば中庭には何なる事の在り居るやは知らざる程に候ひきやがて氣を付けの令と共に「今夜喇叭は用ひず……前へ――オイ」と此の一語耳に森と浸み渡りし粛然心を正すの感言もあり候ひきこれより踏み出す一歩々々は彼の地へ近づく一歩々々なるかを思へば嬉れ敷もあり快くもあり田安門を出でし時路傍に先づ聞く萬歲の聲は難有くもあり忝くもあり見る所悉く改まり聞く所悉く新たにて一種いはれざる感致し候。

靖國神社に告別せし時の如きは吹きなす喇叭の音心魂に徹しやがてわれらも此の社へと思ひし時は粛然襟を正し申し候。

青山停車場にて休憩すると少時長鳴一聲氣を付けを報じ長鳴二聲乘車を命じて十七の客車は二臺の汽關車に引かれて七箇の貨車を附屬せしめて發途第一の萬歲聲

裡に徐々として進行を初め候今は早や聞ゆるものは列車の轟々たる響のみに御ざ候。

夜陰もいとはず篝火をたき火燈をつり國旗を飾り熱心に送迎したるに村民等は如何に難有く御ざ候ぞ過ぐる所の山々河々悉くこれ國民が歡呼の聲を反さざるなく軒傾きたる賤が屋のうちより垣こはれたる荒屋の間より或は紙にてつくりたるもの或は布に書きたるもの押し立てゝ走せいでつゝ萬歳を呼ぶを見れば覺えず腕とりしばられかく迄して送りくるもの如何で一死君に報じまつると共に亦此國民に答へざらんやとの感いたし候而して尤もうれしきは小學校生徒の歡送迎に御座候彼等が楓の如き兩掌を高く上げて狂はんばかりに歡呼するを思へばわが打死も心やすく後事頼むに足るのおもひこれあり候。

到る處の停車塲は歡送迎の國民訣別の父兄にて人の山を築き申し候而して玆にて尤も感動するは兵士と父兄との訣別に御座候車の止まる毎に潮の如く寄せくる面會人は或は名を呼び或は旗を掲て右往左往にわれ後れじ時に違はじと車窓より車窓を求めまはりてほとんど氣も狂わんばかりなれば眼前に居れどもうろたへし眼には止まらず馳せ過ぎて空しく殘る煙に胸をもやすもあれば或は其處にありと知たりれども人多く道隔りこ行く能はず其うち滊笛一聲に泣きわかれするもあり種々雜多なる中にわけて目につきしは岐阜にての一老婆に候ひき列車止まると共に同車せし一人の兵士は己が老婆の居るを認め此處なり々々々々と叫び居りしが彼方に聞こえず停車塲外の柵にとりつき頻りと列車をさがしをりしが漸くにして見付けし時は早や出車に近からんとする折にて人は山を築き柵は押合へし合ひしながら出るも入るもならず如何にかせんとあはつる程いよ／＼詮方なきまゝに彼此共に此の儘にかとそゞろ氣の毒に思ひし折り老婆は一呼吸ウンと叫びて丈に等し

からんとする木柵にとり付くより早く片足し掛けあはやと見るまに跳り越へて早や車窓に來り候われらはアツケにとられ呆然たりしが老婆は片手に心臓の鼓動を押さへ呼吸も絶へ〲に「手がらして歸れや、てがらして歸れや」と申し乍ら懐の金引き出だして涙にむせぶわが子に渡しつゝ尚ほ「てがらして歸れや」と申し候嗚呼誰か此の語を聞き泣かざるものゝ候ふべき老婆はたしかに日本の立派な婦人に候誰れ恥ヶ敷からぬ婦人に候今猶此の老婆が一言は生等が胸にまで響き渡りて身にしみ〲と應へ居り候老婆が與へし訣別の辭は只此一言に候ひきいひたき事も澤山ありしなるべし聞きたきとも定めて澤山ありしなるべし一世の別離母子が訣別千萬無量の思ひありしなるべし而してこれを一言のうちに打固めて「てがらして歸れや」との老婆が心中御察しなさるべく候子を思ふ親の眞情いたる處に溢れ申し候小生も神戸にて母に面會し亦た此の喜びを得申し候。

かくて到る處止まる處に涙と喜びを受けつゝ與へつゝ無事廿五日夜八時夢に見現に想ひ居りし當廣島へ到着仕り候翌一日休足して二日目より愉快に日々練兵いたし居り候間乍他事御休意くだされたく候先は取敢へず御一報如此に御座候。

近衞歩兵第一聯隊第二中隊第一小隊第一分隊

三月廿九日　久留島武彦

家庭雜誌社御中

萬國婦人矯風會世界巡廻員の書翰

謹啓陳れは此に封入致せる書は合衆國萬國婦人矯風會世界巡廻員ドクトルブシチル孃及びマンドリゥ夫人より贈られしものに候兩女史はロンドン府に設けあるピウリチー、ソサイチー（社會の清潔を保持せんと務むる會）のため大に盡力せられし方々にて既に印度に於ては其事業により英政府の官吏及び同地にある分營の兵

士等に由て撿黴條例を廢止致すやう英國の法官をして愬らしむるに至り申候而して此の書は貴國（日本）の人民の前に提出せられたしとの依賴を以て妾等に送られたる者にて候因て妾等は貴社が之を新聞紙上に御掲載被下候事に因りて貴國の人民の幸福のため好結果を得させ給ふことを信して貴社を煩はす事に候付ては貴國にありて貴國の青年の教育に從事せられ居る一人の外國教師が「國家に對する學識ある人物」と題して書せる一文よりの一節を御通譯被下度候其文に

國家に對して學識ある人物の有すべき最も必要なる特性は清潔なる精神なり夫れ國民の清潔は一國の勢力と安寧とに關して最も緊要なるものにして不潔なる國民は決して獨立する能はさるなり見よ彼の有名なる羅馬は一度世界の女王と稱へられ當時敢て其權勢に敵する者非ざらしにあらずや然れと彼も國內の人心壞亂のため其無形なる强敵には敵するに力なく遂に其足下に倒るゝに至りしなり實に其國民の驕奢放恣好色はマセドニア及びカセーレも曾て成し能はざりし結果を來しぬ是羅馬のみに止らず何國に於ても皆然り外國の敵に優りて强きは邪心の勢力にて其國民の道德性弛緩の途に進みつゝあるの國は實に禍たるなり一人の不道德家は一國の强敵にてたとひ其人如何に愛國を大呼するも其聲や吹き過ぐる風の如きのみ軍營に於て熱心忠實に其枝を磨き雪霜の苦を忍びて其術を練るに由て發達せらるゝ勢力も幾多の國の呪詛たる酒客淫行者等の大軍には到底相當する能はざるなり然れは高尚なる教育の貴重なる感化を受し者或は自ら青年の訓導者を以て任ずる者の中斯る者ありとせは如何實に其不節操と恥辱とは言語に表す能ざるべし之に反して學識ある人々の免れ難き責任たるや純鉄なる生活を以て一個人或は一國民の躰格智能道德上の基礎となすべき神聖なる德性の上に其重大なる感化を及ぼすべき事たる明白なり

次て米國に於て有名なる教師及び記者として知られ曾て日本へも渡航せしウヰリアムイーグリフイス博士が或る日本の一青年の事業に付て書せる書より一節を引用致し度候

彼は眞正なる基督教的武士の如く彼がピアロチー或は他の英國の記者が其欲情と誤解より出でし諂媚の言語を連れて日本婦人を說き表せる書により其好色を恣にせんとて歐米諸國より數千の青年の來りし事を見たる時彼の熱血は滿腔に溢れたり

諸君よ諸君は最初に揭げたる一節により實に清潔は國民の安寧存在に緊要なる事を想起し又第二の一節によりて日本は既に公娼あるを以て萬國より惡徒が其情欲を充さんとて自由に且つ密に渡來し得る處となり居るの實事を追思し給ふなるべし願くは諸君よ此の美しき日本國をして世界の妓舘とならしめざるやう且つ日本の女性が世界の不潔悲哀及び嫉惡の通語となることなく清潔なる者の榮譽となるに至るやう御盡力被下度伏して奉祈願候

三月十一日　外國婦人數名

＊　＊　＊　＊

拜啓陳れは妹等儀貴國に滯在中は殊更厚き御待遇を給はり難有御禮申上候妹等は日夜貴國のため且つ諸愛兄姉が將になさんとせらるゝ大事業を成就せられむ爲天よりの斷へざる補助と勢力とを加へらるゝやう祈願致し居り候偖て妹等貴國に在し以來常に切望致せし儀は日本婦人に加へらるゝ大害即ち多少全國婦人の名譽に關する事に付思考せし事又見聞せし事柄を委細御通知申上度事に有之申候其は別儀に無之諸愛兄姉も常に新

聞紙上にて御存知の如く海外に於ける日本婦女賣買の事に御座候近來英米其他外國の放蕩羣が渡海賤業者に對して左の如き感情を以て日本婦女を好む事は一般の風習と相成候并は日本婦人は何事にても人より命ぜらる事は其事柄の善惡を問はず速に從ふとは他國人の比にあらざる故に有之候抑他國の婦女子は自ら善事と認めたる時に非ざれば容易に從ふ事なく或は善事にても自ら望まざる時は從はずして却て惡事を致す事往々有之中候左れど日本婦女に於ては事の善惡を問ず正邪の差別なく何事にもあれ望まるゝに任せ其命に從ふ事に由て彼等惡人の意を滿足せしめ又快よく彼等に從ひ望まるゝに任せて最も恐るべき惡事をも爲すことあり是全く外國の放蕩羣が日本婦人を好む理由の一に有之候第二放蕩なる外國人等は曾て日本政府をして最も忌しき賤業者の爲一の法律を定めしめぬ此の法律に由れば賤業者は皆彼等惡人の便益のため其健康を保持せんため醫士より檢査を受ざるべからざる者と相成居り候以前は斯の如き法律英國の或る市邑或は印度香港シンガボール等各地に實施せられ居りしが斯る制度は淫を行ふも害を招くこと少なからしむるより直接なる淫行奬勵法の如く相成候ものから英國其他各地に於て暫時にして醜行男女の意外なる增加を見るに至り申候尙淫夫淫婦の增加は之に胚したる惡病の增加を來し候事實發見致され候故英國議會に於ては殆二十年以前此の制度を廢止致すやう決議致し候まゝ最早英國に在る賤業者は强て檢査せらるゝ事無之候以後同議會は此の制度即檢黴條例は英國附屬の各殖民地にありても同樣全廢の旨命令致し候左れど印度シンガボール香港南亞弗利加等にては道德上の思想最も卑き官吏多きを以て賤しむべき公許妓舘及ひ娼妓檢査の廢止を拒む者有之候故政府は再三之を訓令するの必要有之候因て彼等は近來に至ては甚た狡猾なる手段を用うるに非ざれば斯る隔地に於ても英國の制度を犯すことの困難なるを感じ居り候印度香港シンガボール等にては印度及び支那婦人等は追々此の制度を知り檢査を拒絕いたし候故に官吏も强る能ざれば其地にある放蕩者は益々大金を投じて日本婦人を購ひ出すの窮策を案し居り申候彼等は第一日本婦人は從順にして命ぜらるゝまゝに檢査を受け候事第二日本婦人は本國に於て檢査に慣れ居り候を以て自然に檢査を拒むことなく惡徒をして寧に政府の禁を犯すに便ならしめ候事等の二箇の理由を以て日本人を珍重致し候例せば英國派遣の官吏が本國政府の命令によりて檢査は隨意たる事を賤業者に布告致し候や否や凡ての娼妓は殆皆檢査に行くことを停止致し候にも拘はらず獨り日本婦人のみは依然としてやむること無之候現今シンカボールには一千八百人の娼妓ありて中百五十人は日本人にして餘は殆皆支那に候而して檢査の隨意たる事布達せらるゝや支那人の檢査に就きし者三人に過ぎざりしに日本人は十五人有之候由是實に一千八百九十一年の事なり又一千八百九十二年七月の報告に由れば檢査に來りし廿二人の娼妓の中日本人十二人歐羅巴人一人支那人八人マレー人一人にて有之候

一千八百九十三年一月の報告にては隨意に檢査に來りし廿八人の娼妓の中廿三人は日本人にて有之候由英政府より派遣せらるゝ殖民地の醫士ドクトルエーアルスより殖民地の書記に宛て贈りたる書中ドクトルエーアルスは（日本婦人は檢査を受べき制度ある事を望み申候如何となれば彼等は本國に於て此所（香港）に於て見ざるほどの嚴重なる檢黴條例の實施に慣れ居り候故に彼等は屢々余が退院せし後病院に來りて翌日余より診察を受るまで相當なる手當を施されたしと主婦に乞ふこと有之候）と申され候由に御座候

ストレートセトンメントの近邊なるピラクに於ては妓婦に關する事務を取扱へ候官吏等は檢査を命令的ならしめんことを請求致し一千八百九十一年九月に殖民地の書記官に向て左の書面を送り申候（マレー婦人は公

娼（撿查を受くべき者）となるや否や從來の生活をやむるか或は其市外に移轉致し候支那人に於ては斯る命令は彼等を此國より立去らしむるに至るかの恐あるほどに候左れど日本人に至ては隨意に命に從ひ困難を興ふること無之支那人より遙か取扱ひ易く候）此等の事實は殖民地の官吏か英政府へ書き送りし書面より寫し取りしものに候此の事を申遣し候は諸兄姊が明かに此事は單に妹等の說のみに非ずして法官も之を識認致し候事を御承知に相成且つ現今貴國に於て賤業者のため設けらるゝ制度は賤業者か本國に於て檢査に慣れ居り候故隨意に檢査を受又容易に惡徒の處置に從ひ候を以て何國にても日本人のある所にては密に檢査の組織を保存し得るやう相成候を以て却て他國の娼妓に適せしむるに至り候事を御理解被下れんが爲に御座候

借て日本よりつれ行れ外國諸港に於て妓館に賣られし者の數は聞く所に由れば左の如くに候

ボムベー	三十八人	カルカツタ	二十一人
ラグーン	百二十一人	シンガポール	百五十人
ピナング	九十人	香港	六十人
合計	四百七十九人		

此の調査は警察官の調によるものに候へば確實たる數には有之間數候警察官は屢々其事務を怠りて充分なる調査を致さず候故此の統計に入らざる數多の者可有之候

此の外倘ポートセート　マドラス　モルメーシ　マンダルー上海ピラデバヌタツク及ひカナダの太平洋に接する海邊等各市に於て日本婦人有之候曾て其良人と共に東京其他各所に於てメツデスト教會の宣教師として働き居られ當時桑港に設けある日本人のためのミツションに於て監督の任を取り居らるゝフローラーベストハリス夫人の申さるゝには當時桑港及びカリホルニヤ間に於ける日本婦女賣買は全く停止せられたるにより當時桑港の妓館には一人の日本人も無之候此の大事業は桑港在住の日本基督教青年が日本領事の補助を得て成し遂げる事に候と

又ストレートセトレメントの一千八百九十一年度の戶籍表より次の事實を了知致し候一千八百八十一年間に其國に在りし日本人は男十二人女十四人なりしが一千八百九十一年には男六十一人女二百六十四人となり中十五歲以下の者は十三人に過ぎず故に三百廿五人の日本人中子供は只十三人のみなれば結婚し能ざる者許多あること明白に候尙同年攝政官の報告する所を見ればピナングとシンガポールとの二市に於て二百四十九人の娼妓有之候由因て二百六十四人の日本人中正當なる婦人は十五人に過ぎざる事を確知致し候未た其中にても疑はしき者多く有之候そは同國の他市に於ても日本娼妓有之候事を聞き及び候抑々斯く不良なる日本婦人の多く外國へ參り居り候上彼の惡徒等は此等諸國へ賤卑なる日本婦人をつれ行く事を喜び居り候ものから未た一度も日本へ渡航し其實情を見知らざる人々は一般に日本國には一人も高尙善良なる婦人非ざるものと信ずるに至り候是實に日本婦人全躰否全國民の名譽を損する事に候誠に日本國に在る善良なる日本婦人の爲並に全國民のため海外諸港に行はるゝ日本婦女賣買は全く廢止せられざれば日本國のため甚しき不名譽と存し候シンガポールに在る善良なる日本婦人の友人より聞き及び候には彼の婦人は該地に於て日本服を着用し或は日本人なる事を口外致し兼れ候そは外人は日本人と云へは皆娼妓なりと思ひ居り候故なりと凡て人類は自己の目擊せし所を以て萬事を推測致し候故多くの人々は「日本には一人も善良なる婦人なし余は多くの日本人を見たれども皆惡しき者のみなりし」と申候勿論斯る者は思慮なき徒にして自ら日本に來り日本婦人の實情を見るに非ざれば日本人に關して萬事を知りし者といふ能ざる事を考

へざる者に候妹等は基督に於ける日本婦人の姉妹として男女に係らず日本基督信徒諸兄姉に切望致し候第一日本婦人をして外國娼妓に適せしむる制度即ち日本國に於て公許妓館の設置と公娼の檢査とに關する制度を廢せられん爲に務むる事第二既に熱心に着手せられつゝある如く外國妓館へ日本婦人を賣り渡すことを停むる事（妹等は新聞紙上にて既に此點に於て着手せられつゝある事を拜讀し欣喜に堪へず候）第三女子をして彼等に命すべき權利なき者に阿從せざるやう且つ神に對して罪を犯さしめんとする者には斷して從はざるやう教訓すること妹等は既に各國巡視中に見聞せし所の婦女の卑賤なる有樣に關して明かに事實を擧けて表白致し候妹等は此の英國の國會議員の前に此の事を提出致し議會に多くの證據を與へき然れとも此の點に於ける事業未た成就致せしには無之妹等は英國附屬の隔地を支配致さるゝ殖民地事務大臣リツポン卿に一度對面致し又々近日對面せん事を期し居り候斯の如くにして國會議員は妹等の事業の大なる賛助を與へらるゝリツポン卿と共に香港シンガポール各地をして此等の事に關する良き政治の下に歸せしんめと期望致し居り候我等は英國をして其義務遂けしめん爲には此の世に於てなすべき事は如何にもして爲さんとの決心に御座候尚貴國の諸兄姉は其必要に應して日本語に譯せらるべき英文の書籍を充分御所持の事と存し候此等の書類は撿黴條例即ち妓館を免許し賤業者をして檢査を受しむる制度は二個の緊要なる點に於て失策なる事を示し候第一制度は疾病を停止する能さる事第二制度は淫惡を奬勵する事

日本國にある諸愛兄姉が此事業に於て婦人矯風會と共力して ピウリチー、ソサイチー（社會の清潔を保存せんと務むる會）を組織せられんことを希望致し候此の設立せらるゝに於ては諸兄姉に助言及び書類を贈與せらるべき英國に於ての有力家を御紹介可申上候此等の人々は既に英國に於て大なる成功を奏し今又印度香港シンガポールに於て同樣の事業を致され居り候終に臨みて諸愛兄姉が凡て取らるゝ公義の事業の上に天父の優渥なる祝福あらんことを奉祈願候

萬國婦人矯風會第三第四世界巡廻員
エリサベスアンドリウ（夫人）
ドクトル　ケートシトブシ子ル（孃）

追伸日本諸兄姉中此社に宛英國へ直接に文通なさんと望まるゝ御方は英國ロンドン府ウエストミニストルキングストリート一番フオセース孃と御宛名被下度候

日本諸兄姉御中

世の中は三日見ぬ間の櫻かな

《口繪の繪解き》

『世の中は三日見ぬ間の櫻かな』の一句能く人口に膾炙す、何故に然る乎。

夫れ櫻は三日にして爛熳と咲き揃ひ、又三日にして名殘なく散り失す、然らば世の中はの句は前後孰れの場合にも適用せられ得るにあらずや。

然れども世界の事物を觀察するに善觀的と悲觀的と樂

天主義と厭世主義とあり、善觀的或は樂天主義より觀察する時は、世の中の事物一として善ならざるはなく又樂しからざるはなし、若し悲觀的或は厭世主義より想念する時は、世上の事々物々悉く惡ならざるはなく、又悲しからざるはなし、事物の是非善惡は其物にあらずして、見る人の心にあるなり、櫻に對する觀念も亦同じき理なり、善觀すれば『世の中は三日見ぬ間の櫻かな』の一字一句、忽ち活氣活動を帶び來り、悲觀せば死氣無常と變ずるにあらずや、物を察し世に處するの義理、多端を要せず、人生須く善觀的たるべし、樂天主義たるべし。

編者曰く口繪の繪さきを書き終る時、恰も櫻をうたへる韻文來る、錄して同好の一覽に供す

いでや手折らむ櫻花

花のや露子

一

いでや手折らむ、さくら花。
とふ人もなき　山里の
無常のかぜに　ちらむより
いざや來よかし　わがやどに。

二

わが夫の君は　あさゆふに
いのちの水を　そゝがせて
我を愛でます　こゝろもて
汝をもつねに　めでまさむ。

三

あはれ手折りぬ、さくら花。
ゑめるを見れば　汝もまた
春のめぐみに　おのづから
人のなさけも　知りにけむ。

四

ふもとの道に　わが來れば
いつしか日影　くれそめぬ。
櫻手折りし　山邊より
夕風さむく　吹きそめぬ。

五

風にあてじと　さくら花
右の袖にて　さへぎれば
右のたもとに　風ふれて
あはれ一輪　散りにけり

六

いと悲しさに　さくら花
左の袖にて　さへぎれば
左のたもとに　風ふれて
またも一輪　ちりにけり。

七

花よ、いましを　あはれみて
手折りしことも　あだなれや。
とても吹くべき　風ならば
ふくがまゝにも　まかせてむ。

八

ふかれ〳〵て　散り殘る
一輪だにも　朝ゆふに
わが夫と共に　愛でやらむ。
花よ、いそがむ、わがやどに。

時事一斑

尙武の風漸く盛なり

日清戰爭の結果は、我國が土地と償金を得たるのみならず、我國人民をして敵愾の心、尙武の風を起さしめたり、見よ小兒の遊戲は日清戰爭の眞似を爲し、或は旗取、競走等凡て活潑の趣を帶びざるはなし、青年の

娯樂に於けるも、日清戰爭以來擊劍、柔術、角力、射的、競走等の武骨なる運動に移り、トランプ又は花かるた顔色なき傾向あり、太平時代は人を柔弱にし、戰爭時代は人を强硬ならしむるとは誠に眞なるかな。

劇社會の一進步

從來東京の俳優には歌舞伎役者と鈍帳役者の區別あり、鈍帳役者は政府に對して『道化手躍』の鑑札を受け居れば、其社會に於ても大に輕蔑せられ、歌舞伎役者と自ら齒するを耻ぢ、たとへ腕前の勝れしものと雖も、大芝居に出勤する能はず、當時劇塲社會は宛然藩閥政府の形狀ありしが、今年四月の年度變りを機會とし、愈々大小役者の組合調ひ、其等級課税を定めたり、其課税は一等（月税五圓）二等（三圓五十錢）三等（三圓）四等（一圓五十錢）五等（一圓）六等（五十錢）七等（三十錢）八等（二十錢）なりと、彼等其品行を善良にし、學識を宏博にし、技藝を熟達せば、之より日本の劇社會も進步の途に就かん歟。

風俗大に取締る

近時に至るまで社會の風儀大に壞亂し、藝妓と稱するものより下は則ち曖昧女所謂私窩兒白首なるものも府下到る所に巢窟を搆へ表向きは銘酒屋喫茶店麥湯などの店を張りて淫を賣る事甚だしく是れが爲め大いに風俗を害するのみか彼の恐るべき黴毒も知らず識らず蔓延するの景况なるにぞ其筋にては今回又大いに是等の取締を嚴重にさるゝ爲め從前の規則警察令第二十號を廢止して一昨一日更に警視廳令第八號を以て其取締規則を定められたり今回の規則に依れば第一に待合茶屋、遊船宿、貸席、料理屋、第二に銘酒、喫茶（薄茶コーヒー店等も此中に籠るべし）麥湯、氷水、其他客席の設けある飲食店、第三に藝妓屋等の營業を爲んとする者は族籍住所職業氏名年齡屋號及び營業の塲所を詳しく記して所轄警察署又は分署を經て警視廳に願出で其

免許を得たる上にて開業し若し他へ移轉する時も此手續きを踏むものと定め是迄右營業をなし來りしものも今回は新規蒔直しとして來る五月三十一日迄に殘らず此手續に依りて屆出で警視廳の見込みを以て充分確實にて曖昧の所業なしと思ふのみに免許さるゝ次第なれば免許されざるもの其數多きは必定にて今日以後は右營業者の數は大いに減ずる事なるべし扨て斯の如くにして充分其素性等を調べたる末免許すると雖ども倘ほ世の人の妨げ若くは風俗を害する所爲をなし又は内々他人其名義を假すものと認めらるゝ時は免許の效を失ふものとし又此營業者が族籍住所名屋號等を變へたる時と廢業したる時は五日以内に所轄警察署又は同分署を經て警視廳へ屆出づべし又此營業者が雇入即ち雇女等を雇入れ藝妓屋が藝妓を抱えたる時は其住所氏名年齡藝名其他從前の住所職業等を詳く記して三日以内に所轄警察署又は同分署へ屆出で其事項に異動を生じたる時も同樣の手續きをなし郡部にては巡査派出所又は駐在所へ其屆書を差出しても宜しとの定めなるが右に記したる三箇條の屆出で方の規則を犯したる者は一日以上三日以下の拘留又は二十錢以上一圓二十五錢以下の科料に處せらるゝ者なり以上記せし如き規則なれば曖昧屋の狼狽一方ならず淺草公園の如き曖昧の銘酒店百三十七戸もあれど是等は從前の經歷に因て今回の規則にては迚も免許さるゝ望みのなきもの丶みなれば中には驚いて急に轉業の仕度に取懸り半分以上は營業を差止めらるゝに相違なき有樣なり、國家のため社會のため大に祝賀すべき事なり

目下の行樂

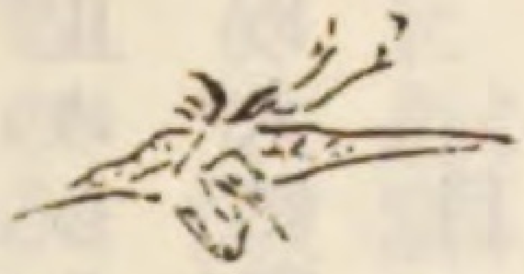
躑躅は今月末則ち二十八日の日曜日頃より、場所は牛込大久保、藤、牡丹は五月初旬より、藤の名所は本所龜井戸天滿宮を始めとし、芝山内辨天地畔、九段牛ヶ淵、目黒不動等、牡丹は本所四ツ目植文を第一とし、



四谷新宿薮屋敷、大久保百花園、目黒、麻布今井邸、淺草公園花屋敷等

釣漁を好まるゝ諸君は品川臺場邊に行き玉へ、針魚獲物多し、鱚は八十八夜（五月二日）後ならでは早し、川魚は釣上手の手にピン〳〵と水上に躍る好時節なり

目下最も摘草の時候に適す、清遊を好まるゝ人々は家族を引連れ、黄菜綠麥の間を逍遙し、活潑なる運動を試み、新鮮の空氣を呼吸するは娯樂と衞生一擧兩得の妙策なるべし。





明治廿五年九月十四日遞信省認可



東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行